



戯曲  
暮れる多良岳

五幕九場

松本義圓

第一幕

時	所	人
大正中期の初秋	軍港町の盛り場に蓋を開けた曲馬團の小屋	
	海軍二等水兵	太吉 廿六位
	曲馬團の娘	千代 十八位
	町の顔役	源太 四十位
	曲馬團長	權七 五十位
	曲馬團の道化者	三次 四十位
	曲馬團の下使ひ	林 三十位
	曲馬團の娘	政子 十六位
	曲馬團の娘	花子 十五位

子 分 數 名 群衆大勢

舞臺

曲馬園小屋の團長部屋、丸太が縦横に繼ぎ合せて組立てられてある、後は全部天幕である、下手は土間になつており、曲馬園の道具が散亂してゐる、下手七分目に井川曲馬園と印入りの帳りの下つた出入口がある、上手は少し高くなつた疊じきの部屋である、部屋の片隅に机が一つ置いてあり、その上に時計がかゝつてゐる、丸太に二本の靱と三枚の法被がかけてあり、天井から電燈が一つ下つてゐる。

幕あくと、源太が三次の酌酒を飲んでゐる、傍で政子がおどくし乍ら座つてゐる、舞臺裏より古くさい黄曲の音が流れて来る、ドラの音と、客引きの男の聲と、觀衆の拍手が交り乍ら聞えて来る、源太少し酔つて何かいらくしてゐる、三次おろくして酌をする。

三次―親方、御立腹は御尤もです、ですが、もう直ぐ千代公も來ませうから、もう少し御待ちなせい

まあ、それ迄もう一つ。

源太―(盃を投げる) 矢嘩ましやい、さ、さの位、べらく云やい、んだ。

三次―(頭をかき乍ら) へい。

源太―へい? 間抜けた顔するねい、て前達は朝迄、こうして待たせる氣だらう。

三次―(あはて乍ら) 減、減相な、もう直ぐ。

源太―撲るぞ、大低人を馬鹿にしろ、もう直ぐ、も、もう直ぐつて待たしやがつて、三、三次、これでぎの位待つたと思ふか。

三次―(困り乍ら)御尤です、そ、それが。

源太―ふん、貴様等、嘗めてるんだな、お面白い、嘗めるなら嘗めてみろい、だが俺にも考へがあるぞ。

三次―(すっかりまごつく)親、親方、そりや。

源太―云ふな、何がそりやだ、俺やもう歸る。

三次―(頭を叩き乍ら)困つたな……………

(政子を見て)おい政公、何を愚圖ついてるんだい、もう一度(目がほで合圖する)それ。

政子―(判らないでおどくする)は、はい。

三次―(じれ乍ら)え、判らねえか……………

源太よろめき乍ら立ち上ろうとする、三次あはてゝ止める

三次―親方、それぢや殺生です、えゝ、千代公は何處に居るのかい、人がこんなにしてるのも知らないで。

(源太の着物にすがる)お、親方、後生ですから座つて、おくんせい、後生ですぜ。

源太―(よろめきつゝ)いや歸る、恩知らず奴等、何をぬかしやがるんだい、馬、馬鹿野郎共!!

源太立ち上らうとするがよろめいて倒れやうとする

三次―(あわてゝ止める) 危ない、だから云ふんです、お願ひだから座つて、おくんせい。

源太―(尙も立ち上り乍ら) 馬鹿、俺や歸る、この位嘗められて平氣でいられるか、こら、俺はなあこうして

も、この町では泣く兒も黙る顔役だ、て前等に嘗められたミ云はれちや、俺の顔にかゝわらあ  
三次―(困りはてゝ) 旦那そりや。

源太―な、なにがそりやだ、三次、て前等、この曲馬團がこうして、ぎ、ぎんちゃん、やつてる事の  
出來たのは、誰のお蔭か忘れはしぬえなあ。

三次―冗談はお止しなせい、こうした人間ですが、恩を忘れるなんて、三次の顔が泣きまさあ。

源太―ふん、口廣い事云ふたなあ、だが止せよ、それ丈知つてるんだつたら、何故千代を引きづつて  
來ねえんだ、權七の承知すみだ、何處に隠しやがるんだい。

(政子をみる) 政子、て前、本當に知らないのか？

政子―(政子、源太の顔を悲しげにみる) 親方、勘堪しておくんさい、私、私少しも、少しも(泣きだす)

源太―(突き離す) 泣くない、直ぐ泣きやい、ミ思つて、ぎいつも、こいつも、癪に障る奴許りだ、こ  
ら下、下駄を出せ。

三次―(懸命に止める) 旦那、後生ですから。

源太―あてになるか、出せミ云つたら、下駄を出せ。

三次―困つたなあ、政公、親方を呼んで來な、

政子―はい（泪をふき乍ら立ち上る）

三次―（あせり乍ら鋭く）早やく、行かんか。

政子―（ハッとして）はい。

三次―（懸命に止める）親方、少しでもいゝから、待つておくんなせい。

三次しきりと止めるが源太よろめきつゝ振ひ拂ひ乍ら下に降りかける、とドラが聞えてくる、政子立つて出て行こうとすると中に入つて来る權七とばつたり行き當る

政子―アッ

政子よろゝと倒れる、

權七―（靱を振り上ぐ）痛え、何所に目があるんだ、

政子―（怖れ乍ら右手で防ぎつゝ左手で源太を指す）御免なさい、あの、親方が御呼びなので…………

權七―何!!（振り上げた靱を下ろして下駄をはこうとする源太をみて驚く）おゝ、親方、これはどうなすつ

たので？

源太―（にらんだ儘無言）…………

權七―親方、一體、さうした云ふのですか？

源太―（無言）…………

權七―困りますなあ、さうしたのです？

源太―大概、人を馬鹿にしろ、俺はもうこれで充分だ。

權七―(判らない困る) 三次、これはどうしたのだ？

三次―(困つてどもる) へ、へい、そ、それが。

權七―さうしたのだ、親方にみんな、無調法をしたのか？

三次―(すっかり困り) へい、その千代公がその……

權七―(初めて氣付く) 千代？ お、千代は何處に居るのか？

三次―(青くなる) それが、未だ顔を見せないのです。

權七―(下手を見て) 未だ來ねえ？ 畜生、味な眞似をするな、子供だと思つて甘くするな、何時の間に  
か、嘗めやがる、三次!!

三次―へえ

權七―確かに來ねえんだなあ

三次―へ、へい

權七―よし、今度こそ、酷い目に逢はせてやる、親方、これは飛んだ無調法をやりまして、眞に相濟  
みません、まあ一寸待つておくんない、俺が直ぐ引きづつてきて、うんこくらしてやります  
源太―いや、もう、俺や、何も要ねえ。

權七―親方、そうは云はず、私に免じて赦しておくんない、今になびかけて見せますから。

源太―（無言）……………

三次―親方、上つておくんなさい。

源太―嫌だミ云つたら、嫌だ。

權七―まあ、そう云はず。

三次―そう云はず。ごうぞ

源太表面嫌々そうに上る

權七―三次、お前知らねえんだなあ？

三次―（はつとする）へ、へい、一向その。

權七―ふん、そうかよし、（外に向つて）おい!! 其處いらに誰か居ねえか？

……………外から返事なし

權七―誰か居ねえかミ云ふのだ？

林（出入口より顔を出し）―お、

權七―居るなら、早く返事せろ、何だ入口から顔丈け出しやがつて、一寸こつちへ來い。

林―へえ、何か用か？

權七―用があるから呼ぶんだ、貴様、千代を見はしなかつたか？

林―千代坊？

權七—そうだ。

林—（薄笑み浮べ乍ら）へ、へ、へ、

權七—妙な笑ひをするな、知らねえかミ云ふのだ？

林—へ、知つてるミ云へば知つてる、知らねえミ云や、知らねいし。

權七—馬鹿の癖にじらすな、撰るぞ。

林—知てるだ、

三次キツとにらむ、林おどくする

權七—知つてるんだなあ、よしそれちや連れて行け。

林—（三次をみる）は、は。

權七—（下りて肩をつかみ乍ら）一體何處にゐがるのか。

林—（下手を指す）あそこよ。

權七—あそこつて、何處だ？

林—小屋の裏よ、へへ、若い水兵ミ、抱き合つて、泣いてらあ。

權七—うぬ、やりおつたなあ、よし、案内せろ。

林—はあ。

權七、林を引きづる様にして出て行く。政子、三次、何かの恐れを期待して顔見合せる。そして淋し相にう



つむく、源太二人をにらみ乍らせゝら笑ふ

源太―ふん、大低、そうだろうさ。

三次―親方、あれも可愛想な子でねえ。

源太―やかましいや。

三次―(うつむく)へえ

源太―こつなつたら、意地でもなびかせるぞ畜生!!

三次―(力なく)へえ

源太、冷笑を浮べ乍ら飲みだす、政子うつくまつている、時々二人の顔をのぞく様に見る、裏から大波小波の音楽、客引の聲、觀衆の拍手等が交錯して聞えてくる

と急に部屋裏より男女の争ふ聲が入り亂れてくる

聲―來い云つたら、來るんだ。

聲―いやです。

聲―そんなに、しなくてもよいぢやないか。

聲―黙つてろ、貴様は何のため來るんだ。お前には用がないんだから、さつきから、歸へれ云つて  
るのが聞えないのか。

聲―俺は歸らぬ例へ艦に遅れても、歸られるものか、それぢや千代が可愛想だ。

聲——何!! 歸らぬ、林、こいつを引づり出せ。

聲——お。

聲——離せ、離さぬか。

聲——離してたまるか。

聲——千代、來い云つたら來ぬか。

聲と共に突かれて千代、出入口から土間によるめき倒れる

千代——嫌です。餘りぢやないですか。

權七冷笑し乍ら入つて來る

權七——何が餘りだ、世話を焼かせるのも程があるぞ。

(源太をみて) お、親方、引きづつて來やした。

千代——(源太を見て) 未だ居るのか

權七——何をぬかす、さあこつち來やがれ。

權七、千代を引きづり上げる、千代うつむいたまゝ動かぬ、權七、憎々しげに千代の髪をつかんで千代の顔を引き上げる

權七——さあ、俺の顔を見ろ。

聲——離せ、離さんか。

聲——離すものか。

聲——離せ!!

争ひつゝ太吉と林、もつれ乍ら、出入口現れてくる、髪をつかまれた千代の姿を見て思はずカッとなる

太吉——(權七をにらみ乍ら乍ら)、おい、そりや餘りだぞ!!

林——(太吉を止める) 餘りもくそもあるか。

權七——若造、お前の知つた事ぢやないわい。

源太——(權七に) 色か?

權七——へゝ、飛んだ狼で。……

源太——(じろりと見る) 狼か?……

太吉——狼?

三次、政子、うつむく、太吉、林の手より離れようとするが林離さぬ權七憎しげに千代をねじる

權七——やい、千代、よくも俺の顔に泥を塗つたな、昔の痛い目、忘れたのか。

千代——(にらんだ儘無言)……

權七——あれ丈云つてゐたのに、何故云ふ事聞かねえのだ、貴様の我儘の爲め、今さうなつてゐるか、貴様知つてゐるか。

源太、薄笑ひを浮べて見てゐる、三次、政子顔をそむける

千代——（無言）……………

權七——反抗する氣だな、よしそれぢやこうしてやる。

權七、千代をねじ伏せる

千代——（齒かみしめて無言）……………

權七——まだ、黙るな!!

千代——（反抗的に口を切る）ぢや、云ひます、お前は畜生だ、人でなしだ、お前は何十邊、私を人身御供にやればいゝんです。私は今迄じつゝ我慢してゐた、然し、太吉さんを知つてからは、もうそんな穢らしい事、死ぬより嫌です、え、死ぬより嫌です。

源太——（思はず冷笑す）ふん。

千代——（源太をにらむ）助!! 何がおかしいんです、何がふんです、色魔!!

權七——（皆まで云はせず）生意氣、云ふこ。

權七、千代を撲りつける

權七——未だ、これでもぬかすか。

千代——（反抗的に）えゝ、云ひますこも

權七——よし、云へたら云へ、こうしてやる。

憎惡に燃えた權七、千代の腕をねじ上げて靱をふり上げる、三次驚いて止める

三次—あゝ、それ丈勘堪しておくんなせい。

權七—(三次を突き飛ばす) 邪魔するな。

權七、無中に千代を撲りつける、千代ちつと黙る、太吉餘りの事に死力で林を突き飛ばし、千代をかきよせ  
權七をにらむ

太吉—貴様、そりや、べらほうだぞ。

權七—なに？

太吉—なんほ養ひ子だこて餘りぢやないか

權七—(冷笑を浮べ乍ら) 止せ、俺の養娘は俺の勝手だ。味な出しやばりするこ、命がねえぞ。

太吉—斬るこ云ふのか、面白い、斬るならさつぱり斬つてもらはうか。

權七—云ふたな、よしこうしてやる。

權七、矢庭にドスを突く、太吉うなつて素早く海軍小刀で防ぎ構へる、源太冷笑し乍らそれを見る、三次はおろ／＼し、政子はうつふす、林急を告げるため戦きつゝ出て行く、薄氣味悪い沈黙がつゞく、何も知らず、靜かな音楽、客引きの聲が聞えてくる、急に出入口騒しくなる

聲 —殺<sup>は</sup>らして丁へ!!

聲 —何故、入らせぬか!!

聲——邪魔するこ、貴様迄やるぞ!!

聲——まゝ待つて下さい。

聲——待たれるか、親方の大事ぢやぞ!!

聲——でも、その刃物丈けは

聲——愚圖々々ぬかすな

聲と共に出入口より見る、林の告口で知り源太の子分三四人曲馬團の男の止めるのを聞かず入つてくる、源

太にやりと笑ふ、太吉千代の顔色變る

子分——(源太に)親分、相手はいいつか?

源太——(うなづく)こいつだ。

子分——殺らしますか?

源太——やつてみる

聲に應じて三人ドスを抜く、太吉向をかへて身をかまへる、が太吉、周圍の殺氣に少しづつ押され行く、千代この有様にまつ青になり、ぶる／＼戦く、時計突然、靜かに三時を打つ、と太吉まつ青になり、千代、顔をけいれんしかける

千代——(突然突立つ)あゝ歸艦の時刻!!

太吉——(ばつたり坐る)うゝむ。

千代―(太吉をみつむ) 太さん!!

太吉―(只青くなり無言) ……

千代―(急に太吉を押す) 歸つて、歸つて!!

太吉―(反抗的に) ば、ばかな。

千代―(悲しげに) 何が馬鹿なの? 艦に遅れたらどうなる?

太吉―今更、歸つたら、お前はさうなるか?

千代―(皆迄云はせず) 私はさうでもない、もう負けだわ、もう、もう。(涙がほろ／＼流れ出る)

太吉―(はげむ如く) それは出来ぬ、それぢやお前が可愛想だ。

千代―(狂氣の如く) いゝえ、もう私の事は忘れて、貴方は、お歸り、早くお歸りつたら。

權七―(勝誇つて) あは、ゝ、飛んだ芝居だ、おい若造、足元の明るい中に歸へろ、まあ今度は見のが

してやらあ。

太吉―(權七をにらみ) 何!! 俺や、歸らねえぞ、

千代―(令命する様に) 何を云ふの、お歸り、私の事で艦を遅れたらさうする!!

太吉―そんなこと、今更なんだ

源太―(せゝら笑ひ乍ら) 歸れ歸れ何ほじたばたしても千代はこつちのものだ。

太吉―(はね返そうとして) なんの

源太―なに!! (子分を見て目でやつけると合圖する)

子分待つたと計りがばと肉薄する、太吉苦しみをかくし切れずよろめく、千代おろくしていたが急に鋭く

太吉を突き倒す

太吉―(驚き) 何をするのだ?

千代―(憎しげに) 馬鹿!! お歸り。

太吉―馬鹿?

千代―馬鹿だよ、大馬鹿だよ。

太吉―(千代の態度急變に呆然とし無言) ………

千代態度急變し急に源太の膝に、にじりよる

千代―ねえ、親方もうあんな阿呆は放つきよ、それより一ぱい、ついで頂戴。

源太も呆然とする、權七、子分等も、彼女の急變に目をはる

千代―(何も知らぬ顔で) 何故つがないの、三次、ぢやお前ついでおくれ!!

三次―(驚いたまゝ無言) ………

千代―(投げる様に) しみたれた顔お止し、誰れも酌して呉れなきや、もう頼まない。

源太―(驚き乍ら) お前本氣か?



千代——（苦しげに）うそ氣で飲めますか。

源太——（嬉しげに）よしちやついでやるぞ。

千代——（ぐつと飲みほし）も一つ。

源太、無言でぐつ、千代又、ぐつと飲みほす

千代——も一つ（ついでもらひつゝ太吉を冷笑し乍ら）おほ、なにをそんなににらむの、馬鹿もこれ丈徹底すりや文句がないわ。

太吉——（思はづにじりよる）なに？

千代——ほんに愛想が盡きるわ、可愛いから歸れつて云ふんぢやないよ、僅か女一匹位に、自分の務めを忘れる様な男に、今更愛想が付きたからさ。

太吉——（怒りの餘り無言）……

權七——（太吉を冷笑し）あはは、青公さうだ歸つたらさうだい。

太吉——（齒がみし乍らうなる）うむ。

千代——（あざける様に）もうお前なんか大嫌ひになつた、私の事なんかいらぬお世話だ、さつこお歸りよ。

太吉——（カッとなる）それぢやさつきのは嘘言だなあ!!

千代―(大形に源太にしがみつゝ) あ、恐わ、まあ大きな目をして、なんだいお馬鹿!! 歸れ云つたら

歸れ。

源太―(大きく) あは、

權七―(源太を見乍ら) あは、

太吉―(顔面青くなる) よし、歸る、貴様、奴が恐ろしなつて、急に裏切つたのだな。

千代―(苦しげに) 裏切るもくそもないよ。

太吉―よし、今の言葉を忘れるなよ!!

千代―(悲しげに無言) ………

源太―(勝ち誇り) 何を愚圖々々ぬかす、こつと歸れ(子分に向つて) おい、入口を開けてやれ。

子分達入口を開ける

太吉―覚えてろ!!

太吉悲憤の胸おさへてよろめき乍ら飛び出る、源太、權七、子分、顔見合はせ大きく笑ふ

源太、權七、子分―あは、

千代悲しげに見送る、が、千代急にヒス的に笑ふ

千代―お、ほほ、

源太―(千代に) おい、お前仲々芝居がうまいぢやないか。

千代―(きくりとし) 芝居ぢやないよ、本氣でやつてゐるんです。

源太―そりや嬉しいなそれぢや今夜うんこ可愛がつてやらあ。

源太酌をし乍ら千代を抱く、千代するが儘にまかせるがたまらなくなりうつむく、突然舞臺でドラの音がする、と花子入口から、おどくし乍ら顔を出し何か云はうとする、權七素早くみとがめる

權七―(うるさげに) なにか用か?

花子―千代姉ちゃんの出番なの。

權七―出番? 何ミか繰あはせておけないか?

花子―(低く) えゝ。

權七―困るな。

千代―(何か決して) 私行くわ。

權七―行く?

千代―えゝ、すぐ済むんですもの、(源太に) ね、一寸いでせう。

源太―(嫌々乍ら) うん。

權七―(ほつとして) そうして貰らつたら、何よりだ。

花子、姿を消そうとする、千代、呼びとめる

千代——（立ち上り乍ら）花ちゃん、待つて、一緒に行きませう。

花子立ち止る、三次、千代をみる

三次——俺も行こうか。

千代——そう、一緒に行こう、政ちゃんもおいで、これが最後かも。

源太——え？

千代——いえ、何でもないので、ぢや、待つて、ね、ぢや行つて来るわ。

源太——うん。

千代、三次、政子、花子、一緒に行つて了ふ、後に權七、源太、えたり顔に微笑む

源太——毒を以て、毒を制した譯だなあ。

權七——案外、うまく行つたわい。

源太——あは、  
權七——あは、

源太、何かふところを探す、そして金入れを出して百圓札を二三枚つかんでやる

源太——こりや、少しだが花代だ、取つて呉れ。

權七——（表面嫌そうに）親方、そうして貰つちや？

源太——（押しかぶせる様に）なに、小遣だ、さつておけ。

權七——（嬉しそうに頭をかき乍ら）では、お言葉に甘へまして、へ、。

源太―ぢや、祝ひ酒だ、一つやらう。(子分に) お前らも上つて飲め

權七―では、

五人飲み初める裏よりドラの音が聞えてくる、拍手、それが止むと、三次の聲が微すかに聞えてくる

聲―さあ、さあ、此度は當曲馬團の最後の決死的空中曲藝で御座い、當座の花形、千代子嬢を初め

座員のスターを撰りまして、御覽に入れます、うまく行きましたら、破れん許りの御喝采を!!

すさまじい拍手聞ゆそれが止むと華やかな音楽になる、時々觀衆の熱狂的野次聞ゆ

聲―いよう、千代ちゃん!!

聲―花形、たのむぜ!!

聲―しつかり。

又拍手聞える源太、權七と顔見合はせ微笑む

源太―仲々、にぎやかだな。

權七―これも、親方のお蔭けです。

源太―(打ち消す様に) いや、だが一つ、千代公の、仇な姿でも、覗ごうかい。

權七―へ、。

源太、天幕の穴から覗く

源太―ほう、大した、大入りだ、お、千代が第一のブランコに乗てるぞ、お、ふつた〜、や、第

二のブランコに飛び移つたぞ。

観衆の拍手溢れ 何か大きな興奮にかられる、權七と子分はちび／＼やつてゐる子分飲むのを止める

源太―足が天井へ行く、身體がくるりミ廻つた、あッ、第三のブランコだ!!(何か怖れを感じず)おや、これや!!おかしいぞ。

(首をかしげて)何だ、あの様は、なつていないぞ、もう少しで落ちる所ぢやないか。

源太帶をしめなほして見る

お、ふつた、手が飛んだ、アッ第四だ、(観衆の拍手、嵐の如く聞ゆ)お、ブランコが上へ／＼行く、やつ、おい、權七、千代がおかしいぞ、外の奴の顔色が眞青だ。

權七―(打ち消して)何、大した事は

源太―あせつて)そうぢやない、あつ、すべつた、お、足で止めた、あれから落ちたら粉みじんだ、

お、飛んだ、第五だ。

観衆の拍手聞ゆ、音楽クライマックスに進む

源太―權七、こりや危い、見ろ。

權七―(しぶ／＼みて突然怖れの聲で叫ぶ)こりやいかぬ、私は舞臺へ行つて來ます。

源太―お、ブランコは天井きり／＼だ、ふつた、ふつた、足が天井につく様だ。おや、こりや危い。

突然舞臺で權七の聲がしてくる

聲——綱をも一つ、加へろ、危いぢやないか。

突然觀衆の中より、恐怖の叫びが出る

源太——（恐怖にかられ乍ら）お、ふつた、あつ千代が片足で、立つた、あッ、うおう!!や、やつた!!

狂氣の如き叫びが觀衆の騒ぎの中から聞える、源太顔をおうてばつたり座る

聲——落ちた!!

聲——綱の外だ!!

聲——醫者はごこだ!!

聲——血が!!

聲——足が!!

音樂はたと止み、大騒ぎがこゝまで聞える、源太、呆然としてゐたが戦き乍ら子分をみる、と出入口のあたりが急に騒しくなつて戸板に乗つた千代をかついで權七、政子、三次、花子、等其他の男達が入つてくる、  
源太、子分、走りよる、三次狂氣の様になつてゐる花子、政子泣き崩れる

三次——さうもおかしいと思つたんだ、だが醫者はまだか。

政子——（泣き乍ら）千代姉さん!!

花子——（取りすがり）姉さん!! さうしたのく。

權七——（いま／＼しげに）ぶさまな、こぢ踏みやがつたなあ。

權七、源太を見て、何とも云へぬ苦笑ひをする

源太——（苦笑ひし作ら）さうだ、助かるか。

權七——さあ、判らねえです。

三次——（狂者の如く）早よう、醫者を呼べ、血がぎん／＼流れてるぢやないか。

花子——（千代をゆすり）姉さん／＼。!!

政子——（千代にすがり）氣をさまして、千代姉ちゃん!!

千代微すかに動き出す

三次——お、動きかけた、氣がつきかけたらしいぞ。

源太——（押しのけつゝ）退け／＼、おい、千代!!／＼、氣がついたか、（手をひたひにやる）俺だ、判るか

源太の手を、千代無意識に軽く押し拂ふ

源太——（軽く失望して）俺だ、判らないのか、俺だ。

千代戦きつゝ無意識に手を微すかに上に上げる、皆ちつと身を引いてみつめる、千代口を動かす

源太——何？ 何？

千代——た!!

源太——た？

千代——（かすかに）た、た、きち、さん、

源太、がく然として身を引く、千代ぐつたりと手を下ろす、皆顔をそ向ける、千代の目再び閉づ、源太苦い顔をして、つばをはく……靜かに幕



## 第二幕

時 前幕より一週間後、夜  
所 軍港町の裏長屋

人 千代

良助 貧民長屋の亭主 五十位

良治 良助の子 廿七位

治平 近所の者 五十位

舞臺

裏長屋の良助の家、天井から薄暗い電燈が一つ下つてゐる、みすぼらし部屋である、下手が上り口になつてゐる、上手に、はげたんす、すゝけた時計があり、たんすの前に机があり、内職のマツチが積み重ねてゐる、中央に火鉢がおいてある

幕あくと、千代が上手の方に頭をおき、ねてゐる、火鉢には良助と治平が差し向ひ乍ら座つてゐる、電燈が二人をぼんやり照らしてゐる

良助——(茶を入れながら) 茶はごうだい。

治平——(受取り乍ら) うん。

二人茶をすゝる、千代寢返りを打つ(顔を観客の方へ向ける) 二人はつとして見る、然し千代目をさまたな

いらしいので、又顔を見合せる、そして暗然としてうつむく

治平——（茶碗を膝において）だが、可愛想な娘だな。

良助——全くだよ。

治平——だが、奴等のやり方も酷でえぢやねえか、健者な時や、搾る丈、搾り取つておき乍ら、もう駄目だとなりや、物置きに捨て、逃げやがる、それでも人間のやり方かな。

良助——あきれて、口が利けねえよ、だが一方から考へるさ、先方もそうするより仕方なからうさ、藥代は入る、金はは入らねえ、それに旅から旅へ、打ちまはる、他人よりだから、一人位に、構つちや、いらねえだろうさ。

治平——そう云はや、そうだけさ、だが、お前達にこうして、救はれなきや、今頃木賃宿から、放り出されて、冷たく眠むつてる頃だろうよ、人の運つて、判らねえもんだな。

良助——（何とも云へず無言）……

千代、微すかに眼を開ける、そして聞くともなし、二人の話しに耳を立てる、良助は後ろにむいてるし治平は電燈の蔭で判らない

治平——（半ば獨語的に）だが、お前も感心だよ。

良助——（何か恥らひ乍ら）さう云はれりや、こつちが恥しいよ、なあに、こりや、良治のはらから出たのさ、なんほ道樂な俺でも、こんな事が今頃出来るかい。

治平——そりやそうだ……こ良治は未だ見えねえが、何處に行つてゐるんだい。

良助——うん、一寸、病院迄入院の談判に行てるよ、こても駄目だろうと思ふが、あいつ、こう云つたら、誰の事も聞かぬい野郎だから、奴の好きな様に、させたのさ。

治平——ちや入院でも、しなくちやならねえか。

良助——そうよ、代診の話に依りやあ、入院でもしなくちや、いけねえらしいさ、入院させるのには文句はねえが、何しろ三四百兩入るこ聞くこ、一寸二の手が出ねえわい。

治平——そりや、そうだ。

良助——だが、あいつ、それでもあちこち、走り廻つて、百圓丈は何こか借りて來たらしいさ、だが、後二百圓位足りねえ譯さ。

治平——で、お願いえしに、行つてゐる譯けだな。

良助——そうだ、雨に濡れるのも構はず、行きは行つたがなあ……（暗然とする）……

治平——うまく、行きやい、が……だが、良治の奴、親じも兄弟でもねえ、赤の他人を、さう迄するなんて、全く頭が下がらあ。

良助——いや、それ丈、俺や今から、心配してゐるのさ。

治平——何故だい？

良助——何故つて、お前も大分老けたなあ、何ほ何でも、何もなくて、誰れが、赤の他人の娘を引こる

ものか、それに相手は、大怪我人だぜ。

治平——そう云やあ、そうだ、ぢや、良くなつて、嫁でもしようてのか。

良助——(淋しくうなづく)そうだよ、大きな聲では云へねえが、良治の野郎、あの娘に首つたけなんだ。

治平——そうか、成程。

良助——それ丈、後が心配だ、お前も知ての通り、あいつは、何の因果か、三つの時から、ちんばの片輪さ、もう年頃だ、親として、嫁でももらしてやりてえのは山々だが、何しろ、貧棒で片輪さ、來たら嫁も一寸無えや。

治平——(慰める様に)なあに、そんな事も、あるめえが。

良助——(打消す様に) お慰さみなら、外様よこさまで云つて呉れ……だが、あいつも、自分の事あ判つてゐるこ見えて、今迄は一言も云はなかつたよ、外へ出るこ行つても、内職のマツチを運びに行く時位だ  
治平——(淋しく)うん。

どこからか、夜泣きうどんの鈴が聞えてくる、二人はつと表をむくだが又元の様になる

良助——まあ、聞いて呉れ、その良治がさ、さうよ、半ヶ月位前頃からだつと思ふよ、何か、そわ／＼して、少しも家の中に居ねえんだ。

治平——うん

良助——夜になると、きまつて人目を忍ぶ様に出やがる、さては何所に行きやがるか知らず、或る日

奴の後からつけた譯さ。

治平——（大きくうなづき）うん、うん。

良助——所が、行つた所は、この娘の曲馬團の前さ、さては曲馬團の看板でも見てるのかと思つたら、なに、この娘を見に行つてたのよ、人影にかくれて、奴、この娘をじつと見てるのだ、こいつあゝ、悪い所を見たと思つてすぐ歸へりはしたが、俺も淋しくつて仕様がなかつたわい。

治平——（うなだれて無言）……

良助——二、三時間もするさ、奴は知らぬ顔して歸つて來たが次の夜になるさ又出て行くのだ、その夜もつけて行つたよ、次の夜も行つた。だがもう四度目はこつちが行く元氣が無くなつた。いや見てゐられねえんだ、中に入るにも金がねえしなあ、一口も口も利けねえで毎晩立つて、胸をこがしてゐる姿を、親として見てゐられるか。

治平——そりや、そうだ、いじらしい片ほれつて、云ふ所だな。

良助——そうだ、だが親の身として、片輪ほざいじらしいものはねえや、なあ治平よ、こめが死ぬ時、あの子の事斗り頼んで死んだが、それす俺や、苦しいや、餘まりいじらしい片戀だ、俺や、もう涙がで、もう涙が涙が（感きわまつてすゝり泣く）

治平——（ほろりとされ乍らも感める）判つたよ、判つたよ。だが、もう泣く事なあ、ねえちやねえか。ほれた娘も、こゝうしてゐるんだから。

良助―いや、そう簡単に行きや、心配はねえよ、考へて見な、若し向ふが嫌ミ云つたらさうだ、相手は他人様の子だぜ、何は何でも恩や義理でしばつて迄、嫁にする事あ、出来めえ、まあ、こうして看病する間なり一緒に居られる位で、満足するのが、山だろうさ。

治平―それぢや、良治の方が、承知しめえ。

良助―それでさ、俺が苦しんでるんぢやねえか。それ、この娘の看病は、何から何迄良治がして、俺にや一本も指を付けさせねえで、やつてるのだ。

治平―（暗然として無言）……

良助―それに、この娘の藥代なりミもてえミ、夜の目も眠ずに、マツチの内職さ、そりや良治、身體を痛めるから、早やう寢なミ云つたつて、俺あ、こうしてるのが幸福だなんて云やがるんだ。戀にや、めくらになるミ云ふが、片輪者のいぢらしい片戀は、胸がつまつて仕方がねえよ。

馬鹿野郎、いつ迄云はなきや判かんのか、そうなるものゝ、俺や、もうやつが、いぢらしくて……

良助、腰の手拭で顔を包む、治平茶碗を膝においた儘鼻をすゝる、千代我知らず出る泪をふいてゐたがたまらなくなつて顔を蒲團の中に突きこむ、どこからか工場の氣笛が、わびしけに聞えてくる、雨の音がかすかに聞える

靜かな沈黙、と表の溝板に人の足音がする、良助、治平はつと我に歸つてあはてゝ顔をふき乍ら表を向く、良

治松葉杖をおいてうなだれて歸つて来る

良治——（力なく）今歸つたよ。

良助——（何事もなかつた様に）お、大變、遅かつたぢや、ねえか。

良治——うん。（力なく座る）

治平——外は雨ぢやろう。

良治——お、治平さんか、雨だ、お蔭でびしょ濡れだ。

良助——さうだつた、元氣のねえ所をみるさうまく行かなかつたらしいな？

良治——（うつむいたまゝ）うん。

良助——まあ、あきらめるんだよ。

良治——（きつと見上げる、憤りが顔に現れてくる）あきらめる？ 馬鹿野郎、あきらめられるものか、誰が

あきらめるか、大體腹が立つぢやねえか。

良助——そうむきになつたて、駄目な事ぢやねえか、よう。

良助——そうぢやねえ、あ、云はれりやお人好しのお前でも腹が立たあ、こうだ（座り直して）一ぶしじゆう譯けを話したんだ、そのあけく後二、三百圓は何さか、するから入院させて、手術つて野郎を、して呉れろうて、頼んだら、成程御同情はするが、病氣が病氣だ、現金が揃はにやきや規則として出来ねえ、こう、ぬかすんだ。

何、拂はねえんぢや、ありません。何さかして、半年位したら、支拂致しますから、御願ひしますつて、一生懸命願つても駄目だ、しめえにやこんな事あ一々ある事だ、お前だけに、規則を曲げる譯には、いかえね、つてんだ。こりや、外の奴等と一緒にされちや、たまらねえ、俺の力が足りねえと思つたから、人の前につけた事のねえ、この頭を、廊下にすり付けて口の動かねえ程頼んだんだぜ、それに向ふは人間として、聞いて呉れねえんだ。

止しやがれ、慈敬病院の名が泣かあ、なあに、こゝ許りが、病院ぢやあるめえこ、考へたからそのまゝ、何さ云はねえで、外へ出たんだ。

良助―外はごうだつた？

良治―駄目だ、貧棒人の病院は、町中探してもありや、しねえや。俺や腹が立つて仕方がねえんだ。

良助―（慰める様に）それでも。

良治―（打消して）それ乍らぢやねえ、俺が町を歩るいて居たら、時計屋があつたと思ひねえ、そのシヨーウインドに、指輪が並べてあつたんだ。

治平―うん。

良治―その中に、減法素的な、ダイヤの奴があつたんだ、お前幾らと思ふか？

治平―さあ。

良治―おい、五千圓だぞ。



治平——（驚く）五千圓？

良治——そうだ、俺あ、その指輪をはめる奴の顔が見たかった。治平さん、有つても無くてもいい、指輪だぜ、俺あ、その五分の一でも欲しかつた。いや、七分の一でもいい、んだ。あつてもなくてもいい、指輪の七分の一ありや、金で買へねえ、人の命が救へるんだ。俺や、しまへにや、その指輪が竪に障つた、硝子窓を打ち破つて、そいつを踏みにじつてやりたかつた。

良助——（急にどなる）馬鹿野郎、大がい振り、愚痴らねえか、て前が何ほ、ぬかしたつてその金が飛んで来ると思ふか、阿呆たれめ。

良治——（口惜しげにうつむく）……

治平——良治、お前の心あ、貧棒人の俺等にやよく判るよ、だが、なあ、俺等は金に縁が無えんだ、俺等の生れが悪いんだ。

良治（反問的に）俺等が悪い？ 治平さん、俺等の何處が悪い？ 俺等は遊んぢや居ねえぞ、朝から晩迄働きづくめだ、それに二人が、食ふにも食へねえ、有様ぢやねえか、働いて食へねえ、そして貧棒する俺等が悪い、一體何處をさして悪いんだ。

良助——（きせるを投げつける）馬鹿、何をぬかす、今更、初まる事か。

良治——俺あ、あきらめられねえ、さうしても、あきらめられねえ。

良助——止せ云つたら止せ、何度云つたら判るんだ。

良治——（良助に向ふ）ぢや、さうすりやいゝんだ。ちゃん、この儘したら、千代さんは死ぬ乍らだぞ。

良助——（無言）……

良治——死んでもいいか。

良助——（何と云つてよいか判らない）……

良治——成程、お前はいい、かも知れねえ、だが俺はそれぢや、済まされねえんだ。何のため、連れて來

たんだ、死なすためぢやねえぞ。

良助——（優しくいたわる様に）なあ、お前の心はよく判つてるよ、だが俺の心も察して呉れ。駄目な事あ  
何度云つたつて駄目だ、それより、外の方法を考へる事が大事ぢやねえか、さうだろう？

良治——（つまつて無言）……

良助——（うつむいて無言）……

三人、寂然として、うなだれる、良助やほら顔を上げる

良助——（治平に）何さか、出來ねえかなあ

治平——そうだ、三人寄つても考へが出なきや世も終りぢや、ねえか。

治平考へこむ、良治ぬすむ様に千代の方をみる、そして苦し相にうつむく、と治平、顔を上げる

治平——（何か云ほうとためらふが思ひ切つて口を切る、）良助さん、一つあるんだがなあ。

良助——（口走る）何だい？

良助——お前、黙つてきな、一體ぎんだい。

治平——（云にくそくに）だが止そう。

良助——何故だい。

治平、良治の顔をみる、良助打消す様に云ふ

良助——構はねえ、話しな、なあ（良治に）え、だろう。

良治——（何か不安げに）うん。

治平——でも、氣を悪くしちゃ、いけねえぜ。

良助——話した、悪くするも、せんもねいぢやねえか、（良治に）お前もそうだろう？

良治——（尙不安げに）うん。

治平——ぢや云ほう、つまり捨身の法だ。

良治——捨身？

良助——（うなる）うーん。

治平——（うつむく）（無言）……

良助——（深くうなづく）判つた、それぢや身賣りだな。

治平——そうよ、それで金を作るんだ。

良治―（顔色を變へる）なに？身賣り？お前、本氣で云ふのか、おい、本氣だつたら俺あ承知しねえぞ。

治平―（驚く）だ、だから前以つて斷つたぢやねえか。

良治―（つまる）……

良助―（深くうなづいて）判つた、俺も薄々は、そうぢやないかと思つてたんだ。

良治―それぢや、餘りだ。

良助―馬鹿、よく聞け、賣るのも事によりけりだ、搾つて食ほうと云ふんぢやねえ、あの子の命を助  
けたい斗りだ、譯を話して、前借金で入院させ、全快してから、約束の期限丈勤めたら、それ  
でい、んぢやねえか、それも女郎ぢやあるめえ、酌婦か、仲居でも、その位の金は出らあ。（治平  
に）なあ、お前の心は、そうだろう。

治平―（うなづく）そうだ。

良治―俺あ、嫌やだ、斷じて嫌だ、それぢや俺の立つ瀬が無え。

良助―ぢや、お前、何かあるか。

良治―（つまつて無言）……

良助―無えだろう、それが當り前よ、これ以上、外の方法ぢや、大金の出る所は無えんだから。

治平―そりや、そうだ。

良治―ぢや世間は、さうする？

良助―（ギクツとする然し決然と云ふ）世間？何も恥ぢる事たあ無えよ、上前でもはねるのなら、兎も角命を助けたい斗りの苦肉の策ぢやねえか。

良治―（苦しみ乍ら）でも、俺あ、俺あ。

良助―（さとす如く）お前の云ふ事あ、判る、だかもう、きたんばだぞ。

良治―（うなる）うーん

良助―さうする。

良治苦しげに頭をかきむしる、そしてたまらなく打ち伏す

良助―判らねえぢやねえか、さう云ふんだ。

良治苦しさの餘り、泣き出す、二人暗然とする、良助ぢつとみる

良助―（痛々しげにみつめる）良治、泣いても仕方あるめえ、さうだい。

良治急に頭を上げる

良治―（急に口惜しげに叫ぶ）この足が、この足が丈夫だつたら。

二人たまらなくうつむく、良助きつとにらむ

良助―（にらむ）見苦しいぞ!!

良治かばとうつ伏す、おえつのみ聞える

良助―（やさしく）さうするて云ふのだ。出来る、出来ぬは問題として、お前の意見を聞きてんだ。

良治——（無言）

良助——ごうだ、聞くか？

良治——苦しげにうなづく

良助——（慰める如く）無理も無えや、ぢや、そうする事にしやう。明日でも、娘に相談する事にして、

兎角、相談に行かなくちやなるめい。

治平——そうだ………いろは屋はさうかい。

良助——うん、兎に角、行つて見やう。ぢや、良治、お前、一寸待つときなよ、直ぐ歸つて来るから。

良治——（無言）………

良助——行つてくるぜ。

二人良治に氣がねし乍ら立ち上つて出て行く、良治うつ伏した儘、顔を上げぬ、二人の足音消える、ガバと  
泪にぬれた顔を上げる、そして苦しげに千代を見る、千代眠つたふりをしてゐる、良治近よる

良治——（真心に苦しみ乍ら）千、千代さん!!

千代——（眠つた振りして無言）………

良治——千代さん。

千代——（無言）………

良治——（半ばほつとし、半ば淋しげに）眠つてゐるのか、そうか。

勘忍してくんなよ。俺が悪いんだ、意氣地の無え野郎だ。なあ、だが、こうなるより方法が無かつたんだ。お前恨むかも知れねえ、だがそれ丈、俺も苦しいのだ俺あ、腹が千切れる様だ。

千代——（無言）……

良治——俺あ、お前の命が助けたかつたんだ。（こゝ迄云つてハツとする）（急にカブリを握る）そうぢやねえそりや嘘だ、お前を死なしたくなかつたんだ、お前と永久に別れる事が、たまらねえんだ。赦るしてくんな、お前見下け果てた、人間だと思ふだろう。だが、そう思はれる丈、俺や悲しいや。

外でコトリと音がする、良治ハツと身を引いて、あたりをみる、何もないので、又近よる

良治——千代さん、お前、恨んで呉れるなよ。なあ、俺あ、お前と別れたかあ、無えんだ、ずつこゝろして居て貰ひてえんだ。いや一生居て貰ひてえ、だが、そんな事も、もう出来なくなつたよ。千代さん、お前何て因果だろうな、こんな片輪者に、ほれられるなんて

良治、急に自分の足を見て、淋しげになる、千代の手に目を止どめる、何か感激にかられて戦く手を伸ばすそして、千代の手を握る、千代なすが儘に任かせる、もう一度良治あたりをみる、そして千代の手に口づける、千代その儘に任せる、どこからか、工場の汽笛が鳴ってくる、良治はつとする、又千代の顔をみ下す、戦く手で蒲團を上げて千代の顔を見る、千代眠つた風を装っている、良治激情にかられ、千代の唇に、口づけして了ふ、千代顔を横に向ける、良治ハツと身を退く、大罪を犯した如く眞青になつて戦きだす。

良治——(千代に悲しげに) 千、千代さん。

千代——(眠つたふりして無言)……

良治——(顔をうちふす) 赦るしてくんな、赦るしてくんな、赦るして……

千代——(眠つたふりして無言)

良治——(突然立ち上る) 俺や、大それた事、して了つた。見下け果た男を出して了つた、なんて恥らずだ、なんて俺やあんな事して了つたんだ。濟まねえ事した、俺あ、ごうしたらい、んだ、ごうして詫びたらい、んだ、千代さん濟まねえ、俺あごうしたら、ご、ご、ご。……

良治よろ／＼と倒れる、夜泣きうどんやの鈴が又聞えてくる、良治急に慄ましげに顔をあげる、眼から涙がぽた／＼流れ落ちて来る、靜かに幕。

### 第三幕 第一場

時 前幕より半年後 夕方

所 軍港町海岸通りの飲食店

人 千代

太吉

良治



くま 飲食店の女將 卅八位

あき 飲食店の酌婦 廿一位

よし 飲食店の酌婦 廿三位

半造 飲食店の亭主 四十位

杉田 海軍二等水兵 太吉の仲間

流しの夫婦

水兵 町の者

## 舞臺

下手が海岸通りになつてゐる、上手は飲食店の土間である、奥に帳場があり、小だんす、机、帳面等がある、土間にテーブル二脚、椅子が六個ある、テーブルの上に羊羹や菓子の入ったガラス瓶が置いてある、も一つのテーブルには、花の活けた花瓶と大正琴がある、入口には、のれんがかゝつて一膳めしの印入りの長燈灯が一つぶら下げてある、

幕あくとテーブルに千代、あき子、よし子の三人座つていて、あき子大正琴を弾ひいている、流行小唄をである、よし子小唄を歌ふ、千代は何か思ひ沈んでゐる、よし子一寸と唄を止める

よし—(千代を見て) 千代さん、さうしたのさ。えらい、沈んでるね、男でも思つてるのかい。

千代——（ハツとする）（無理に笑顔を作る）いゝえ、そうぢやないの。

よし——判りやしないよ。だが、あのちんばさんは誰だい、親類かい？。

千代——（微かに）え、。

あき——（琴を止めて）でもあの、千代ちゃんに、ほの字ぢや、ないの？

千代——（ハツとする、何とも云へず無言）……

よし——お前さんも、因果ね、あんな片輪に思はれるなんて、振つておしまひよ。

千代——（うつむいた儘無言）……

あき——千代ちゃんの様な、別嬪は御難ね、まるで活動で見た、嵐の孤兒の主人公の様だわ。

よし——ほう、あき公、えらい事知つてゐるね。

あき——（すまして）そりや、貴女さ一寸、頭が違いますからね。

千代——（何か考へている）……

よし——ふん、うまく云つてらあ、三文博士はちがふね。

あき——（崩れる様に笑ふ）三文博士はよかつたね、ほゝゝ、

千代——（思はず笑ひに引きつけらる）

三人笑つてゐると奥から、くま、顔を出す

くま——お前達、何をがやく——云つてゐるの、もう夕方ぢやない？、それに今日は軍艦が三隻入つたんだ

ぜ、さつさこ、そこらあたりを片付けたら、さうぞう。

千代、軍艦と聞いて顔色をさつと變へる、そしてそれを隠そうとして、うつむく

あき——（不承無承に立ち上り）はい、はい。

千代無言の儘立ち上る、くま一寸憎しげに見る、そして奥へ入る、あきは、表道を掃きかける、千代、よし中を掃きかける、表を二人の男歩きかゝる、あき呼び止める

あき——一寸、およんなさい、旦那よ。

二人互にかへりみて、にやりと笑ふ

あき——（甘へる様に）大將、およりよ、ねえ。

男一——（じらす様に）止せよう、今日は忙しいんだ。

あき——そう云はず、おは入りな。

男二——又來るよ、おい行こうぜ。

男二、男一をつれて歩きだす

あき——（見送りつゝ冷笑す）ちえつ、近頃、さいつもこいつも、不景氣な顔してやがる。

され、掃はいて、丁ふかい。

あき、掃きかける、下手より良治、松葉杖をついて來る、表にあきがいるので、はつとして身をかくす、あき、知らずに掃きかける、水兵二人、微酔の面持ちで下手より來る、あき、につこり笑ひ乍ら近よる

あき—よう、大將、一ぺん、やんねい。

二人の水兵、じろりとみる

水兵一—な、なに？。

あき—おは入りな、一ぱい、ごうです、ね、い、でせう。

水兵二—(水兵の二に)ご、ごうする。

水兵二—うん、入つてい、ぞ。

あき(元氣よく)—そう來なくちや、いけない。よしちやん、千代ちやん、お客さんだよ。

千代、よし掃く手を止めて迎へる、あきの聲に、くまも出てくる

千代水兵姿にハツとする、だが直ぐ平常にとり直す

よし—まあ、初來ね、こちらへごうぞ、何か、持つて來ませうか。

水兵一—何でもい、一ぱい出してくんな。

くま—はい、お二階はごうです。

あき—そう、二階がい、わ、こつち、おいでなさいな。

水兵一—そうか、だが、お前達、ダ、ダンスはやるか？

よし—だんす？

水兵二—そうよ。

あき―そんなもの駄目だわ、でも外にいゝ事があるかも知れないよ。ねえ、お上りよ。

水兵一―二階に上つて、ベッドダンスでも、やろつてのか。

水兵二―(にやりと笑ふ)

よし―ベッドダンス？

水兵一―(打消す様に) 何でもねえよ。さあ、二階は、どこだ？

あき―(上をさし) こちら。

あき、よし、水兵二人を二階に案内する、後に千代一人残る、くま、千代を見下す、千代うつむく

くま―(憎々しげに) お千代、少しやあの二人を見習ふがいゝよ、いつ迄も知らぬふうでは、すまされ  
ないからね。

千代―(うつむく) えゝ。

くま―いつも、えゝだ、お前にや人一倍大金がかけてあるんだ。いつも云ふ様に、しなきや、今晚も

亦、酷い目に合はせるよ。

千代―(怖れを感じてはつとする)…………

くま―(鋭く) 又黙る、すぐだ、何もほんやり、しないで、さつさゝ片つけて了ひな。

千代―(微すかに) えゝ。

二階から、よし下りてくる

よし―おかみさん、何かよい様に、二人前早うたのみますよ。

くま―(見上げ乍ら) あゝ、あ(奥へ向つて) 半さん、二人前たのむよ。

聲 ―おつこ、合點だ。

よし、又二階へ上る、くま傭場の新聞を持つて奥へ入つて了ふ、千代、靜かにテーブルの上を片づけ初める

眞治、人目を忍んで、のれんから顔を出す、千代の姿を見て微かに呼ぶ

良治―千代さん。

千代ハツとして眞治をみる、そしてにっこり笑み乍ら迎える

良治―(きまり惡げに) 又、來たよ。

千代―どうしたの? こんな夕方。

良治―(どきつとして) いや、一寸、そこら邊り迄用があつたから、顔を出したのさ、近頃どう?

千代―えゝ、でもまあ、こちらへおかけ。

良治―うん。

千代、眞治を腰掛けさせ、その向ひ側に自分も腰かける

千代―近頃、お父さん、變りない?

良治―(力なく) うん。

千代―それはいいね、貴方何か喰べない?

良治——いや、もうええよ、そう度々迷惑になつたら俺や心苦しい。

千代——遠慮しなくてもいいよ。

良治——うん。

良治、ひどく沈んでいる時々千代をぬすみ見る、千代ちつとみる

千代——貴方、何故、そうすぐ沈むの？

良治——（無言）……

千代——氣分でも悪いの？

良治——いや。

千代——（悲しく微笑み乍ら）おかしな人ね、人の顔を見て、沈むなんて。

良治——千代さん、俺、お前に濟まないんだ、こんな苦しい商賣させてなあ、考へるこたまらねえよ。

千代——又、その事、いつかも云つたでせう、私決して恨んでもいないつて、貴方からそんなに云はれるさ、こつちは何云つていい、か判らないわ。

良治——でも恨んでるだらうな。

千代——（強く否定して）そんな、ね、もつミ外の事話しませうよ。

良治——（ちと沈んだなりもの云はぬ）……

千代——さうしたの？

良治―（苦しげに）俺、お前に、云ひてえ、云ひてえと思ふ事があるんだが……。

千代―（何か或る怖れを抱き乍ら強ひて微笑みつゝ）そう、どんな事？

良治―（急に黙る）……

千代―（弟を見る様にして）どんな事、云つてごらん。

良治―（顔を上げる）いや、止そう。

千代―何故？おかしな人ね、お云ひよ。

良治―（キツと顔を上げる）千代さん、酒を少し呉れ。

千代―（驚く）酒を飲みたいの？

良治―いや、酒でも飲まなきゃ、云へねえんだ。

千代―まあでもそう飲んだら身體にさわりやしない。

良治―（無言）……

千代―では、少し持つて来るわ、さわりさへしなけりや、なんほでも上げるけぞ。

千代、そう云ひ乍ら帳場にとりに行く、良治憫ましげに千代の後姿を見る、千代酒ビンとコップと持つてく  
る

千代―ウイスキーよ、では。

千代、コップにつぐ、良治うつむく



千代―さあ、お飲みなさい、そして、何の話か知らないけぞ、云つて御覽。

良治―(何故か飲まぬ)……

千代―さうしたの。

良治―(もぢくして) でも、お前、腹を立てるかも知れねえや。

千代―(何か怖れ乍ら、だが笑みを浮べつゝ) さあ?

良治―ぢや、千代さん、俺の顔を見ないでいてくれ、そしたら云ふよ。

千代―(思はず笑ひ乍ら) 御厄介な事ね、では、見ませんよ。

千代目をつぶつてうつむく、良治酒をグツと飲む、そして何か云はうとして千代を見るが、口が戦いて利けない

と下手の方から、ぐだぐだに酔つた太吉と友の杉田とが出てくる、二人何か聲高に争っている、千代、良治はつとして表の方をみる

杉田―おい、上村、貴様、餘り飲み方が酷いぞ、さあ、もう歸へろ、歸へろ。

太吉―何?、構ふな、お、俺の金で飲むんだ、貴様から干渉してもらねえわい、俺あ、未だ飲むんだ  
飲んでくゝ飲みあくんだ、そうでもしなくちや、こゝこの太吉さんの、む、胸が収まないや。

杉田―困るなや、貴様、さうして、こんなに變つたのか、あんなに眞面目だつた貴様が。

太吉―止せ、變ろゝが變るまいが、こつちの勝手だ、(ふと飲食店に目を止める) おゝ、此處にも一軒あ

らあ、さあ行こう。

杉田―馬鹿な事は止せ、これで七軒行つてゐるぞ。

太吉―七軒も、くそもあるか、そんなに貴様歸りたかつたら、一人で歸れ。

杉田―困るなあ。

太吉―困る？、何が困る？、て前、あれに逢ひてえんだらう、ふん、行つてこい、だがて前、戀人があるなんて、そう偉ばるなよ、こう見えても、お、俺にも、あつたんだぞ、貴様歸へれ。

杉田―そう云はずに、一緒に來い。

太吉―俺あ嫌だ、て前一人で行け、俺あ、一人で歸る、構はん、今日は無禮構だ。

杉田―(仕方なしに) ぢや、俺、一つ用件もあるし、これで別れる事にするぜ、い、か大人しく怪我せん様に、歸へれよ。

太吉―うん、ぢや行つてこい。

杉田―ぢや、さよなら。

太吉―うん。

杉田心残り乍ら去る、太吉見送り淋しい顔になる、が急によろめく

太吉―ふん、行きやがる、さあ俺あ、俺で飲むぞ……こ、こ、が入口だな、おい誰か居るか、お客様だぞ。

太吉よろめき乍ら、中には入る、千代、はつと太吉の顔を見て眞實になる、ぶる／＼駄きだす、太吉も偶然にばつたり千代と顔を合せ目を見はる、良治譯が判らずちろ／＼二人をみる

千代―(悲しく叫ぶ) あゝ。

千代そのまゝ動く事が出来ぬ、太吉漸く判りかける

太吉―(近より乍ら) お、お前は千代ぢやねえか。

千代―(目を向けたまゝ動かぬ、涙がはら／＼流れる)

太吉―(キツとみる) 千、千代だ、千代に違ひねえ。

太吉の顔に怒りの情が湧き起つてくる

太吉―(千代の肩をつかむ) 今迄、探したぞ、こうなりや百年目だ、畜生、忘れはしめえなあ。

くま、帳場に顔を出す手が出す事が出来ぬ、良治奮然として立ち上る、太吉、良治に目もくれず、片手で花瓶の花をつかんだかと思ふと千代の顔をめがけて撲りつける

太吉―うぬ、畜生!!、こうしてやる。

花あたりに散亂す、花に塗れ乍ら、千代じつとして動かぬ、良治きつと太吉をにらむ

良治―やりやがつたな、貴様誰れだ。

太吉―(じろりと見て) なに？、貴様こそ、邪魔するな、俺の女を、俺が勝手にするんだ、餘計な世話

立て、止して貰ふかい。

良治——（かく然とす）貴様の女？

良治、千代を見る、千代うつむき無言

良治——（強く否定する）馬鹿な、そんな事があるものか、千代さんは俺のものだ。

千代驚く、太吉強く心打たれ乍ら強ひてせよと笑ふ

太吉——いつ、そうなつたのか、だが聞かしてやらあ、この千代は一年前から、俺と夫婦約束してあるんだ、虚言と思ふなら、畜生に聞いてみる。

良治、顔色が青くなり、強い打撃のため戦きだす、そして千代に向ふ

良治——（千代の肩に手をやり）千、千代さん、そりや本當ですか？

千代——（悲しげにうなづく）………

良治——（眞青になり）えつ。

太吉——（勝ち誇つて）ごうだ。

良治——（深い絶望の餘り無言）………

良治、よろめいて、千代をみ、太吉を見上げる、深い悲しみの餘り、土間にへたばり顔をおほう、……が何か考へたのか力なく土間に捨てられた松葉枝を拾ひ上げる、どこからともなく流しの琴、三味線の三十三間堂の曲が流れて来る、千代たまらなくなつて、泣き出す、太吉何か察してじつと見る

良治——（二人にともつがず、千代に云ふともつがず、しみりと云ふ）俺や知らなかつた、知らなかつたんだ

約束のある人さも知らず、今迄妙な事ばかり、云つて済まかつた、赦してくんな、千代さん、ぢや俺あ、歸へるよ、今迄随分邪魔になつた、済まねい、お二人共赦るしてくんな。

良治、力なく松葉枝をついて出て行かうとする、千代涙にぬれた眼で見送る、太吉も心動かされて見送る、良治外へ出ると、もう今迄こらへた力もなくなり、べた／＼と大地に坐つたまゝ顔をうつぶす、微かなをえつが、太吉、千代に聞える、二人暗然としてうなだれる

舞臺靜かに暗轉

## 第四幕 第二場

時 前場より二時間後

所 飲食店前の海岸通り

人 太吉

千代

よし

流しの夫婦

舞臺 海岸通りの街路、後ろ全體は飲食店の表、上手が入口になつて、先刻の通り燈灯が一つ下つてゐる、下手

に電柱が一本立つており、街燈が淋しく光りを放つて居る

幕あくと太吉、千代の二人店前の露臺に坐つてゐる、あたりは人氣がない

太吉―（しんみりと）そうか、そりや、その良治さんに、濟まねえ事をした、あそこでお禮旁々詫びに、

行かなくちやなるめえ。

千代―（軽く微笑み乍ら）でも私辛いわ、さう云つて行かうか知ら。

太吉―そうだな、然し、そりや後の話にしよう……だが、お前にも随分苦しい思ひをさせて赦して呉んな。

千代―い、え、私判つて呉れたら、何より嬉しいわ、だが人の運つて、判らないものね、こうして逢

ふなんて、想像も出来ない事ぢやない？

太吉―完くだ、だが、お前も随分俺を苦しませたぜ。

千代―私は、それ以上よ、助けたい乍りにあゝしたのにその心も察しもせず、貴方は腹を立て、あゝして憎くらしい、棄て言葉を残して別れるし、

太吉―（後悔の念にかられつつ）判つてゐるよ、赦るしてくんな。

千代―それに、あの人の、いぢらしい片戀、恩義義理の辛さが、あゝ迄味へようとは思はなかつたわ逢ひたい貴方には逢へないし、いぢらしい、あの人の心は知らぬ振せねばならぬし、それに此

處のおかみは、嫌な事計り強ひるし、もう生きるのが淋しくなつて、毎日、泣いて計り居たわ  
太吉——（何か怒りを覺えつゝ）そうか、では、此處はそんなに酷いが？

千代——えゝ、毎晩、云ふ事聞かないつて、責め折檻なの。

太吉——（飲食店をみ乍ら）畜生！！妙な眞似をさせるんだな。

千代——でも、近頃はもう、考へを變へたちしいの、北海道の何處かへ、鞍變へさせるらしいよ。

太吉——（深く驚いて）そりや、本當か、ぢや、お前、行く氣か。

千代——（投げる様に）仕方がないわ、私嫌な事迄して、此處に居るより、北海道へ行くは、貴方もそれ  
がいゝ、でせう期限さへ切れたら、又歸られるもの。

太吉——（答へ得ないで無言）………

千代——（不審相に）さうしたの、行くのは不賛成？

太吉——（奮然として）俺あ、嫌だ。

千代——（悲し想に）ぢや、嫌な商賣しなくちや、ならないわ、そうなつたら、私も貴方に濟まないし貴  
方も苦いでせう。

太吉——（言葉につまり無言）………

千代——さうせ、一人前の結婚なんて、出来ない二人、二三年、我慢するより外に道がないわ。

太吉——（うなだれて無言）………

下手より流しの六段が聞えてくる、二人しんみりとなる

千代―（流れ来る涙をふきつゝ）でも私達は不幸な二人ね。

太吉―（うつむき無言）……………

千代―（うなだれたまゝ無言）……………

太吉―（顔を上げる）なあ俺の家さへ、普通の家だつたら何さかするんだが、なあ、千代、俺の内は、小作人だ、母親がたつた一人で、小さい子供二人抱へ乍ら、毎日、青ざめた顔して働いているの有様だ……………。

太吉―第一、お前を救ふ、金がねえや。

千代―でも、仕方ないわね。

太吉―だが、お前、意氣地の無え野郎を考へるだらなあ。

千代―いゝえ、仕方がないんですもの、でも私。

千代、太吉の顔を見上げる、流しの夫婦が流し乍ら下手から来る、二人はつとして顔を上げる流しの夫婦流し乍ら上手へ去る、漸く沈黙、二人うらやましげに見送る……

太吉―千代、うらやましいなあ

千代―（悲しげにうなづく）……………

太吉―（急に手を握る）千代、お前、金さへ出来たら俺と一緒になつて呉れるか。



千代——一緒に？、私それが出来たら、どんなあばら家でも嬉しいわ、出来たら（急に悲しくなる）金さへ出来たらねえ。

太吉——千代、その金はぎの位だい。

千代——八百圓なの、ミても駄目だわ。

太吉——（何か考へ乍ら）そうか……

千代——投げ捨てゝる様に）ミても出来ない空想だわ（太吉の手を握る）ね太さん、そんな事忘れて、もう少し辛抱して、ね。

太吉——（考へて無言）……

千代——私もみんなに別れるのが悲しいか知れはしないわ、でもね三四年辛抱して。

太吉——（何か考へ無言）……

家の中から千代を呼ぶ聲がする

千代——（太吉の顔をみる）……

太吉——（何か決心し千代をみる）千代、二三日待つて呉れないか、少し宛<sup>あて</sup>があるのだ。

千代——（不安げに）宛？、でも八百圓よ。

太吉——（強く）うん、待つて呉れ、何かする。

千代——（尙不安げに）そう、それだつたら、私みんなに嬉しいか知れはしないわ、でも

又家の中から、千代を呼ぶ聲がする

千代——（ハッとすると）はい!!

太吉——ぢや、お前、中に行つて來な、俺もこれで歸る、ぢや二三日待つて、くれ、

千代——（不安げに）でも私のため無理をしてはいけないわ、

太吉——（強くうなづく）なに判つてゐる、安心しな、それより二三日したら、出て行かれる様に仕度をしてゐて呉れ。

千代——（嬉しげに）えゝ。

又内よりよし顔を出す

よし——千代ちゃん!! お上が呼んでるよ。

千代——（あはてゝ返事する）そう（太吉を見る）どうしやう?

太吉——ぢや行つて來な、俺もこれで歸る。

千代——（名残りおしげに）では……

太吉——（うなづき乍ら）ぢや、又。

千代うなづいて振り返りつゝ中に入る、太吉見送つて了ふと何か考へる、どこからか鐘の音がする、太吉思はず腕時計をみる、そして何か決した様にうなづく、懷中より海軍小刀を出して中をあらためる、そして薄笑みをす、月が青く彼の顔を照らす

靜かに幕

## 第四幕 第一場

時 前幕より一年半経つた冬十二月大晦日の夜

所 鑛山の小屋

人 太吉

千代

牛五郎 部屋頭 四十五位

勘八 鑛夫 三十位

舞臺 粗末な鑛山小屋の部屋、下手が道路になつてゐる、出入口によつて、上手は部屋になつてゐる、中央には臺所に行く出入口あり、上手に押入があり、その上半分が佛壇になつてゐる、佛壇には餅が二つ重ねて飾つてある、電燈が淋しく一つぶら下つてゐる

幕あくと部屋に寢床があり、その上で病氣で瘦せこけてゐる太吉が、千代の給仕で食事をしてゐる、千代の傍の小蒲團に二人の間に生れた嬰兒が眠つてゐる、外は夜になつて暗い鑛山がぼんやり見える、太吉茶碗をちつと下におく

千代―(手を伸し乍ら) も一つ、ぎゅう。

太吉―(淋しく) いや、もう食べたくない。

千代―(心配そうに) でも、たつた、一ぱいぢやない?

太吉―(投げる様に) 腹が空かないのだ。

千代―そう、未だ、悪いのね、お醫者に一度見て貰つたらどう?

太吉―(何かぎくつとす) 嫌だ!!

千代―何故、そんなに嫌がるの、會社のは金は入らないし、診察丈けでも、して貰つたらいいのに。

太吉―(不安げに) 俺め、醫者は嫌ひなんだ。

千代―(心配げに) でも病氣になつてから、一度もみせないで、賣藥計りでは、何時快くなるか、判り

やしないわ、ね、後生ですから、見て貰つて下さい。

太吉―(茶碗を投げ付ける) 何時まで云ふのか、これ丈嫌ふのが判らないか。

千代―(悲しくうなだれる微かに) はい。

千代、二つに壊れた茶碗を片づける、思はず涙をふく、太吉急に氣の毒になつて優しく口を開く

太吉―今日は大晦日だ、お前も早く、食べて了つて、風呂でも行つて來な。

千代―(優しい言葉に急に嬉しくなり太吉を見上げる) え。

千代、夕食を食べかゝる、太吉、痛ましげに千代の姿を見つめる

太吉―（慰める様にしんみりと）だが、お前もこれ迄、こんな病人や子を抱えて、随分苦勞したな。

千代―（優しく微笑み乍ら）いゝえ、そんな事少しも、ありませんわ、いつも云ふんですが、私ほんこに  
こうして暮す事の出来たのが嬉しいの、ほんこよ、

太吉―（遂笑みにつられて無理に笑む）そう云つて貰へば俺も尙更お前に濟まない氣がしてならない、何

病氣さへ快くなつたら、もう、こんな苦勞はさせないから、辛抱して、くんな。

千代―（うなづいて）えゝ、そんな事でも辛抱するわ、それが妻の役目ですもの。

太吉―（胸がつまつてうつむく）……

千代、つゝましく食事にかゝる、

太吉―（思ひ出した様に顔を上げる）牛五郎さんは、今晚来る様に云つていなかったかい？

千代―（思ひ出して）そうく、そうでしたね。

太吉―あの人の親切には頭が下るよ、俺等は牛五郎さんのお蔭で、こうして大晦日も何なく過せる  
んだからな、だが何かしなくちやなるまいよ。

千代―そうね、私達がああ町から來てから、すうじ、お世話になり勝ちですもの何かとも思ふんです  
が……この有様ちや、何も出来ませんわね、いつも、濟まないくつて考へ乍ら、つい失禮  
計りして。

太吉―（何か考へ乍ら）そうだ、粗末だがあの定國の日本刀でも上げやうか、牛五郎さん、何時か、い

、日本刀が欲しくて、云つてたな。

千代―そうね、でも、あれは形見ぢやない？

太吉―なに、構まわないよ。

千代―そう、それだつたら、牛五郎さんも、随分喜ぶでせう。

太吉―うん……だが、今迄、その位借つてるかな？

千代―（食事を止めて手で數へ乍ら）そうね随分ありますよ、貴方が病氣してからでも、一、二百圓は借

つてはいらないか知ら!!

太吉―その位はあるだらう、も三、四ヶ月、山も休み切りだからな。

千代―でも心配しないでいゝでせう、あの人、出來た時、何時でもいい、つて、云はれてるもの、今少

し濟まないけぞ、待つて頂きませう。

太吉―（濟まない氣持で）そうだなあ。

千代食事が終りかける、と下手より折詰下げた牛五郎、酒瓶提げた勘太を連れて微酔によるめき乍ら出て來る、太吉の家の前で勘太に耳打ちする、勘太にやりと笑ひ乍らうなづく、牛五郎太吉の家の戸をたゝく

牛五―太公、千代公、いるかい？

千代―（はつと食事を止め乍ら）ぎなた？

牛五―（にやりと笑ひ乍ら）う、牛だ。

千代、思はづ太吉をみる、二人微笑む、千代はいそぐと入口へ行つて戸を開ける

千代―まあ、親方ですか、あ、勘太さんも一緒に、さあ、こちらへ。

牛五―(さも寒げに) さ、寒い。

牛五郎、勘太中に入る

千代―どちらへお出でしたの？

牛五―會社によ、そばの御馳走の、歸り道に、一寸寄つた譯さ。

千代―よう寄つて下さいました、今も親方の事を話して居た時なんですよ、さあこちらへ。

牛五―いや、では勘太、上らして貰ふかい。

勘太―へい。

牛五郎、勘太上へ上る、太吉立ち上らうとする、

牛五―(止めて) いや、其儘にしゝきな。

太吉元の様になる

太吉―それぢや、これで失禮させて貰ひます、ようこそ、お寄り下さいました、いつも親方の御厄介にばかりなつて。

牛五―いや、そんな事、心配しないで、い、よ。

太吉―(感激して頭を下げる) それ丈、御禮の申し様もない有様です。

牛五―（打消す様に）なめに、心配は毒だ、ゆつくり養成でもしな。

太吉うれしさにうなだれる、千代食卓を片付けかゝる、牛五郎ちつと千代の姿を見ていたが、あわてゝ止める

牛五―お千代さん、其儘にしていゝ呉れ、丁度幸ひだ、濟まないが、幸ひこゝに折詰ゝ酒があるから

一ぱいやらせて呉れないか。

千代はつとして片付けるを止める

千代―そうですか、こんな事初めてゝすね、ではさうぞ遠慮なくやつて下さいませ。

太吉―（千代を見て）一寸爛でもして差し上げな。

千代―えゝ。

牛五―（あわてゝ止める）いや、いゝよ此の冷やが美味いんだ、さあ勘太もこつち來な。

勘太―（近より乍ら）へゝ。

牛五郎、勘太飲みかゝる、千代酌する、段々、牛五郎酔ひかゝる、牛五郎盃を太吉へやる

牛五―太公、一つさうだい。

太吉―（手を振る）駄目です、親方、さうぞ私には御遠慮なく。

牛五―まあさう云はず。

太吉―（止め乍ら）いえ、病氣が病氣なもんですから。



牛五―（軽く失望の相を現し今度は千代に）ぢや、お千代さんさうかい。

千代―（はつとして辭退する）い、え、私ほんごに無調法なんですの。

牛五―（うつとり見乍ら）お、お前迄斷らなくてもい、ぢやないか、さあ、一つ頼むからやつて呉れ。

千代―（止むを得ず盃を取る）では、ほんの少し。

牛五―（嬉し相に）遠慮は無用だ、さあ。

牛五郎、千代によりかゝり酒をつぐ、千代軽く止め乍らそれを、しかめ乍らぐつと飲みほす、牛五郎うつと  
りと見とれる

牛五―美事々々、も一つ、さうだ？

千代―（あはてゝ盃をふせ乍ら）いえ、もう私……

牛五―（うるさく千代にじりよる）さう云はず、もう一つ、さあ。

千代―（困り乍ら）私、もう。

牛五―（千代の手を取る）さう云ふもんぢやない、一つぎだ。

千代、太吉の顔を見る、太吉うつむく、牛五郎太吉の顔を見て不快相にす、千代それをみてはつとす

牛五―構はねえ、一つ丈けど、やつて呉れ。

千代―（仕方なく）では、本當に、これ一つで勸辨して下さい。

牛五―（千代によりかゝり乍ら）なに、たんごやつてくれ。

牛五郎、千代につぐ、千代、牛五郎からもたれかゝられて迷惑相にし乍ら恩人なものだから、口に云ふ事も出来ず、體を少しづゝよけ乍ら、酒をしかめてぐつと飲む、牛五郎離れやうとする千代をぐいと引きよせ乍ら

牛五―(又酒瓶を持ち)そこだ、これぢや、もう一つだ。

太吉、牛五郎の今夜初めてこうする苦々しいやり方に暗い顔色をする、千代漸く牛五郎に恐れを抱き、顔色が青くなつてくる、そして太吉に救ひを求める様にある、勘太そばで、にや／＼している、千代身を引き乍ら盃を下へおく

牛五―(不快そうに)そう、嫌やがらせしなくても、いゝぢやないか、さあ、こつちへ来て、一ぱい、飲みな。

千代―(泣きかゝつて)親方、もう後生だから、赦るして、おくんない。

牛五郎、無言のまゝ千代を抱き上げ様とする、太吉、苦い顔をする、牛五郎じろりと見て冷笑し乍ら千代に又酒を持つて行く

牛五―さあ、もう一つだ、そう逃げないでもいゝぢやないか、俺に抱かれて飲んでくんない。

千代―(何物か牛五郎の目に感じて戦きだす)いえ、赦るして、親方ごうぞ赦るして。

牛五―(尙うるさく抱きよせやうとす)なに、いゝぢやないか。

千代たまらなくなり、太吉に救ひの目を投ぐ、太吉も餘りの事に遂口を開く

太吉―(親し強ひて苦笑ひ乍ら)親方、冗談は止しておくんない。

牛五―(不快そうに) 何、一度位大目に見たつてい、ぢやないか、それに、赤の他人ぢや、あるめえし。

二人はつと顔色を變へる、牛五郎千代に又にじりよる

牛五―さあ、亭主に構ふ事があるか、さあ飲みねえ、飲んで倒れりや、俺が明日迄でも、介抱してやらあ、さあ。

牛五郎、懸命に逃れる千代をぐつと抱きよせかゝる、餘りの事に太吉口走る

太吉―(囁んで捨てる様に) 親方、そりや餘りミ、云ふ事です、冗談も大概にしたらごうでせう、大體世間體に、見苦しいぢやないですか。

牛五―(千代を急に押しやり乍ら太吉を向く) なに？、そりや、誰に云ふ言葉かい、この牛五郎にかい、ふん、少しや自分を知つたら、ごうだ。

太吉―(ぐつと言葉につまる) そ、そりや、そうですが、餘りなもんですから。

牛五―(冷笑し乍ら)、人間つてなものはそれで濟むかな。

二人はつとして見る

牛五―(惡々しげに) そうぢやねえか、犬でさへ、三日飼つたら恩を知ろぞ、て前等は人間ぢやねえか貴様達俺にこの位、恩になつてるか、忘れはしめえな。

千代―(言葉につまり無言)  
太吉―(言葉につまり無言)

牛五―一度位、借して呉れたつて尉は當らねえ筈だ。

太吉―(判らず詰問的に)借す? 何を借すのです?

牛五―(もどかしげに)判りの遅い野郎だな、て前のお千代をさ。

二人、餘りの言葉に眞青になる

千代―(目をみはつた儘) えッ!!

牛五―(噛み捨てる様に)妙な顔するねえ、さあ千代、こつちへ來い、今夜はうんミ可愛がつてやらあ、

俺あ、早くから、て前にほれてたんだ。

太吉―(驚きの餘り飛び下り)えッ、それぢや、今迄の親切は、皆腹黒いたくらみか?

千代も餘りの事に飛び退いて戦く

牛五―(あざ笑ひ乍ら)今知つたのか、當り前よ、こんな事もなくて、何處の馬の骨か、牛の骨か判りも

しねえ、て前に、何で二百も、三百も、金を恵むか、考へても判らあ。

千代、太吉顔見合せ怒りと後悔に胸つまり無言、千代口惜しげに叫ぶ

千代―(泣きじゃくりながら)知らなんだく、私や、見損つた、大變な見損ひだ。……………

千代その儘うつぶす、太吉もにえかへる怒りも云ひ得ず、

太吉―(血の出る様に叫びたほれる)計られたか、残念だ。……………

突ぶし戦く二人を見て牛五郎、勘太を見てにやりと笑ふ、勘太もにやりとす、そして憎々しく太吉を見る

牛五―（冷笑を浮べ乍ら）千代を借すのが、そんなに嫌なら、今迄の金を皆、耳を揃へて貰ふかい、さあごつちだい、キリ／＼返答しねい。

太吉、千代突伏した儘顔も上げ得ず無言

牛五―何故、黙つてゐるんだい、返答せんか。

太吉―（がはつと顔を上げる）餘りです、そりや無理に云ふものだ。

牛五―（憎々しげに）何が無理だ、俺や何でも構まわねえだ、さあ嫌なら、返せ。

太吉―（つまつて）さあ……。

牛五―（勝ち誇つて）さあ!!

太吉―（つまつて）さあ……。

牛五―（いら／＼して）えゝ、面倒だ、勘太、千代を引きづゝて行け。

勘太―（立ち上り乍ら）おゝ。

千代は何か叫びぼうとする

牛五―（きつとにらむ）泣くな、貴様の亭主の爲めにならんぞ。

千代―（思はず牛五郎を見みる）えッ?

牛五―警察にでも云ふなら、云つてみろ、俺より先、太吉の手が後に廻らあ。

太吉―（眞青になり叫ぶ）おゝ!!

牛五―太吉、覺えがあらう、人相書きは、山迄、廻つてゐるんだぞ。

太吉―（悲痛に絶叫す、がつくり崩れよるめく）し、しまつた!!

牛五―（冷笑し乍ら）ふん、千代、さうだ、あの態をみろ、て前の亭主は、お尋ね者だぞ。

千代―（驚いて太吉に「じりよる」）貴方、そりや、本當ですか？ 虚言でせう、え、きつと虚言でせう？

太吉―（悲しげにうなだれ無言）……

千代―何故、虚言だこ、あいつに云つて返さないの、云つて、云つて頂戴!!

太吉―（慄れみを求める様に千代を見る）俺あ……（消へ入る様な聲で）す、す、すまない。

太吉、たまらなくなり、突す伏して丁ふ、千代餘りの事に呆然となり聲も出ない涙のみがぼろ／＼流れる

牛五―（勝ち誇つて）さうだ、さあ愚圖々々云はず、俺の家に來るんだ。

千代―（うなだれた儘無言）……

牛五―（千代の肩をつかむ）來いこ云つたら、來い、て前の心次第で、亭主の命も助るんだ。

千代―（うなだれた儘無言）……

急に肩を戦かせつゝ泣き伏す

牛五―（こらくなくなり引き起す）めそ／＼何を泣くのだ、さあ立て!!

千代半ばあきらめつゝ、云はれるまゝ呆然と立ち上る、そして太吉に無限の赦しを請ふ目でみつめる、太吉も頭を上げて、これも亦無限の赦しを請ひ悲しく見上げる、牛五郎そんな事は、かまわず引づり行く、勘

太入口の戸を開けて待つ

千代――（感きわまつて叫ぶ）あ、あなた!!

太吉――（血を吐く如く答へる）千、千代、ゆゑ、る、し、て、

太吉、戦く手で拜み乍らうつぶす、千代思はずよろめく

牛五――（邪険に引きづる）えゝ、愚圖々々するな!!

牛五郎、千代を引きづつて下手へ行く、千代何か叫ぶ太吉がはつと入口迄走りよる、と赤坊につまづく、赤坊目覺めて火のつく如く泣きだす、太吉よろめいてばつたり倒れる、戦く手を何か叫び乍ら、下手へ向けて手を合せてうつぶす

舞臺暗黒、幕

## 第五幕 第二場

時 前場の翌日未明

所 前場と同じ

人 太吉

千代

牛五郎

勘太

舞臺前と同じ

幕開くと寢床が散々に亂れてゐる、窓より兵子帯が一本下つてゐる、その下に足かけ臺が倒れてゐる、太吉嬰兒を抱いた儘呆然として坐つて居る、鶏の聲が何所からか聞える、しばし沈黙。

千代、亂れ髪、呆然と下手より来る、自分の家迄來た事を知るとはつとして立ち止る、思ひ切つて戦き乍ら中をみる、入口の戸は前夜より開いたまゝになつてゐる、

千代、太吉の姿をみる、急に上り口に崩れ泣き倒れる

太吉、痛ましげに無限の怒れみの表情で千代を見る、涙がにじむ、太吉うつむく

太吉——（聞えぬ様な低い聲で）千代、もう泣くな、泣かずに上れ。

千代じつと顔を上げる、急にまろぶ様にして走りより太吉にすが

千代——（泣き出す）貴方、堪忍して、堪忍して……

太吉——（涙をいづばいためて）（しんみりと）泣くな、も、もう、すんだ事だ、すぎ去つた事だ。

うつむいた儘抱いた嬰兒を千代に渡す、千代狂氣の様に嬰兒を抱く、嬰兒眠つてゐる

千代——（嬰兒を抱きしめて）坊や、堪忍して、ね、ね、さぞ坊やは、母ちゃんを恨んでるだらうね、堪忍してよ、淋しかつたでせう、皆、母ちゃんが悪いの、ね、ね。

太吉——（たまらなくなり）千代、俺が悪いのぢやないか、俺あ、それを云はれるこゝむ、胸が裂ける様だ。

千代——（泣きだす）



太吉―千代、泣くな、泣くんぢやない、俺を見ろ、もう泣いちゃ、ゐないぞ。

千代、窓の兵子帶を見、そして、太吉を痛はしげに見上げる

千代―でも苦しかつたでせう？

太吉―そりや、俺の云ふ事だ、だが、これも過ぎた事だ、まあ、こつちへ座つて呉れ、話があるのだ。

千代―（何か不吉を豫期し乍ら太吉を見上げる）

太吉―赦るしてくれ千代、今迄、蔭していたのが悪るかつた、俺あ、實は強盜で脱走兵なんだ。

千代―（驚く）えッ、では、あの

太吉―（あはてゝ止める）さあ待て、そう驚かれては、話しがし難い、何を蔭そう、お前の身請けの金は押入強盜で得た金なんだ、それも、お前を救ひたいばかり、いや、好きなお前を添ひ遂げた、ばつかりさ、その上、満期も眞赤な虚言だ、何であの頃、満期除隊があるものか。

千代―（悲しげに）えゝ？

太吉―人目を避けて去つたのも皆そのため、うまく此處迄、來た所をあいつの爲に助けられ。

千代―（涙をふく）

太吉―警察の手も届かねえ山には入つて鑛夫になる事も出來は出來たが、なあ千代、俄か仕立ての炭坑夫だ、病氣になるのが當り前よ。

千代——(うつむき無言)……………

太吉——然し脛に疵持つお尋ね者の悲しさに、行きたい醫者にも通はれず、子供の顔をながめては、あゝ、俺は、さうしたらよからうかミ、明日は捕かまへられはしないか、今日はお縄にかゝりはしないかミ、毎日々々、人の知らない心勞だ。

千代——(聲を忍んで泣く)

太吉——もう、たまらねえ、それ計りぢやない、第一俺あ、その苦しみを我慢出来ても、それ此子が大きくなつたら、可哀想ぢやないか、戸籍にも入る事の出来ねえ、私生兒だ、こりや、こゝが覺悟のし所ミ、此の子をみる度に、今日は自首しやう、明日は山の駐在所へ出かけよう、そう決心はしたものゝ、待て!!、今あ、俺が自首したら、後に残つた、お前ミその子、餓え死にでもさせたら今の苦心も水の泡ぢやないか、こいつあ、さうしたら、よからうかミ、毎日考へ迷つてゐる所へ此の事だ。

千代——(無言のまゝ見上げる)……………

太吉——(千代をちつと見乍ら)俺あ、もう覺悟をきめねばならなかつたんだ千代!!

千代——(はつとして見上げる)えッ?

太吉——お前達二人牛五郎の家へ行つてはくれなないか。あいつあ、憎くゝはあるが、俺の様な意氣地なしぢや無えし、それに、お前に首つ丈けだ、まさか、捨てる事はあるまい、いや、俺より、幸

福にして呉れるかも知れねえ、さうだい？。

千代―（急に情けなくなつて泣き出す）貴方そりや本氣かい。お前それをは正氣で云ふのかい、

太吉―（うなだれて無言）……

千代―（恨めしげ）お前は、なんて情けない事を云ふの、お前は私を、そんな女を考へてるの、え？（急に悲しげにうつぶす）あ、私はお前迄、見損つた、あゝゝゝ……

千代たまらなくなつて泣き崩れる、と急に顔を上げる

千代―貴方、私は何のため、歸つたと思ふの、私や、お前さん三人で、死にたいばかり、歸つたのよ。もうこんな世の中は嫌やだ、もう生きるのに愛想が盡きたのです、それに、お前さんは私に生きれ云ふの、それもあいつの傍に迄、行け云ふの、そりや、無情云ふものだ、餘り情けない云ひ振りだ、私は、私は……（泣き崩れる）

急に千代嬰兒を抱き上げる、太吉無言、此頃牛五郎、勘太が忍んで表で立ち聞く

千代―赤坊、聞いたかい？聞いたろうね、お父ちゃんはある事云ふの、もう坊やも母ちゃんも二人で死んで了ふね

太吉顔うつむき苦しむ

太吉―（急に顔を上げ手をつく）判つた、勘堪して呉れ、俺あ、それ程愛されてる事を知つて、お前に何云つて、いゝが判らない、こうして拜む。今迄の事悪くならないで呉れ

太吉、千代を拜む、千代無言の儘その手を上げる

太吉―何で、あいつにやるのが好きなものか、只意氣地なしのこの根生が考へさせたのだ。

千代―(恨む様に)それ丈でも、私は…………

太吉―俺が悪かつたのだ、赦してくれ、な、だが、俺あ、死ぬ事丈は、嫌やなんだ。

千代―え、？

太吉―俺も死なうと考へた、だが、それぢや、この子が可愛想なんだ。たまへ二人は死んでも折角生れたものを、然かもこの子に何の罪もないのに、自分達の巻きどへに殺すのはそりや殺生だ、おい、一つ何か、方法を考へて呉れないか。

千代―(うなだれて無言)…………

太吉―(考へこんで無言)…………

と急に太吉、頭を上げる

太吉―千代、いつかお前にお父が居ると云つたなあ。

千代―(思ひ出した様に)え、でも、はつきり判らないわ、小さい時、別れたきりですもの。

太吉―今でも健者だろうか？

千代―さあ？…………でも死んでは居まいと思ふけさ…………

太吉―所は何處だ。

千代——此處から廿里離れた、多良岳の山の中よ、

太吉——(何か考へ乍ら無言)……………

千代——どうしたの？

太吉——(無言)……………

千代——(心配げに)何か考へる事でもある？

太吉——(顔を上げる)千代、濟まないが、お前當分此子に、そこに暮して呉れまいか。

千代(驚く)え、!!

太吉——驚くのも無理は無え、だが、これ以上、さうする事も出来まい、お前が此の子に父の所で暮す  
俺あ、これから自首をする。これより外はないのだ。何に、刑務所に行つても、永くて十年さ  
それ丈辛抱すりや、この子も晴れて、俺等の子になれるんだ、私生兒なんて、嫌な文句も消え  
るんだ、天下晴れて、暮す事が出来るんぢやないか、なあ。

千代——(嬰兒を見たまゝ無言)……………

表で立ち聞いてゐた勘太耳をすますとたん、よろめき、戸にあたる、太吉、千代はつとする、太吉無言で口  
止めをし、表へ来る、牛五郎、勘太あはて、後の方へかくれる、太吉表を見ると何者もないので安心して  
中へ入る、牛五郎、勘太、又ぞろ出てくる

千代——誰れ？

太吉―鼠だらうよ。

千代―そう。

太吉坐る

太吉―別れるのは、俺だつて辛いよ、然し、この儘だつたら、一生暗い日暮し斗りなんだぜ、子のためだ、千代、この子のため、決心してくんな。

千代―(流れる涙をふき乍ら) 判りました、貴方の云ふ通り致しませう、全てこの子のためにね。

太吉―そうか、それで俺も安心だ。

千代―でも貴方は、山まで来て呉れるでせう。

太吉―勿論だ、俺がお前の父親にも頼むごしやう、それから自首する、それでも遅くはない積りだ。

千代―(うつむき無言)：

太吉―(何か不安げに) だが、牛五郎の奴、こんな事するかも知れないから、今直ぐでも發つた方がいい、と思ふのだ、未だ夜も明けないし人目を忍ぶのに好都合だ。

千代―えゝ、ではすぐまいるごしませう。

太吉―ぢや、急いで仕度してくれ。

千代―えゝ。

千代、太吉急こしらへの旅仕度にとりかゝる、牛五郎、勘七に何か耳うちする、千代嬰兒を抱き、毛布で身

體を卷き、太吉も毛布で身體を包み、バスケツトを持ち表へ出る、牛五郎、勘太素早くかくれる

太吉、千代あたりを見廻す

太吉―誰も居ないらしいな？

千代―え、。

太吉―(安心して) ぢや、急いで行こう、子供を泣かすなよ。

千代―え、。

千代、子供をあやし、太吉と共に下手に去る、後より牛五郎と勘太現はれ、顔見合せ下手をみる

牛五―誰知るまいと思つて行きやがる、馬鹿者め、その手は食はぬぞ、(勘太に) おい、貴様あいつらの後をつける、行く所は判つてゐるから俺は旅ごしらへをして警察へ密告する事にする、これから、二三日さんだ捕物道中だ。

勘七―へえ、お面白いお慰みで。

牛五―ふん、土産は大きいぞ、警察は大物を捕へるし其の後で俺はお千代を物にするこ、一舉兩得つてこんな事さ、ぢや勘、後は頼むぞ、早く行け!!

勘七―おつこ、合點です。

勘太、二人の後をつけて行く、牛五郎ニヤリと微笑み下手へ歩きかける

……幕……

## 第五幕第一場

時 前幕より三日後 夕方

所 多良岳山中

人 太吉

千代

牛五郎

刑事 四十五歳位

舞臺 雪中の多良岳山中の峠道、杉木立が纏着として立ち並び、雪が眞白に積っている、舞臺中央に粗末な地藏堂があり、その後が斷崖絶壁になっている。

幕あくと、雪が降りしきつてゐる、どこからともなく吹雪のうなりが聞える、上手より刑事と牛五郎とが旅の草鞋姿で来る

刑事――（下手を見乍ら）近道を來た丈、漸く追ひ越した今度こそは逃さぬぞ、愈々奴等の最後が來た譯だ牛五――完くです、昨日云ひ、一昨日云ひまんまこ、まかれましたが、今度こそは、ふん縛つておくんなせい、相手が水兵上りだから、うまく行かなきゃばらした方がよろしいですぜ。



刑事—貴様から云れんでも、それ位は覺悟の前だ。

刑事腰より繩をとりだし準備にかゝる、牛五郎懷中よりどすを取り出す、刑事下手をみる

刑事—上つて來やがつたぞ、かくれる。

刑事、牛五郎素早く地藏堂の後ろにかくれる、下手よりバスケツトを持った太吉と赤坊を背負つた千代とが何も知らず毛布で身を包み乍ら來る

千代—(地藏堂を見乍ら) あゝ、到々上つて來た、貴方、此處迄來りや大丈夫よ、もう一里すりや、内に着くんですもの。

太吉—(不安げに) うん、俺もあれ丈、うまく、まいたのだから、もう此處迄ついては來まいとは考へるが、然しこつちが死物狂ひで逃れ様さしてるのと同様に、あいつ等も死物狂ひで俺を捕へ様さして居るのだ、だから少しも早く行つて片を付けやう、それから男らしく自首をする事にする。

千代—えゝ、でも貴方、病氣上りで苦くはしない。

太吉—(せわしく) なんの、そんな事は考へる場合ぢやないのだ、さあ、早く行う。

千代—えゝ。

千代うながされて、太吉と共に上手の方へ行きかける、刑事後から現れる

刑事—ちよいと、もし……

太吉——えつ!!  
千代——

二人がくぜんとして振り返る、刑事紛装してゐるので一寸ら判ない

太吉——(怪しむ如く)私達ですか?

刑事——へえ、近所に誰も居ませんから、まあ貴方がたでせう、なあ太吉さん。

太吉——(眞青になり)な、なに!!

太吉、思はづよるめく突端、刑事の捕縄、空を飛んで太吉にからみつく

刑事——太吉、御用だ!!

太吉——おう!!  
千代——

千代思はず、身を引く、太吉の片手に投げつけられた、捕縄を振り切り乍ら急にべつたり大地に坐り刑事を見上げる

太吉——お役人さん、判りました、もう覺悟はしてゐたのです、だが、もう少しお見逃し下さい、決して逃げは致しません、もう一時間あつたらいゝのです、後生です。

刑事——(油斷なく、にじりよる)

太吉——憎い奴だと思召しませうが、二時間さば申しません、たつた、たつた、一時間でいゝのです。

旦那お情けです!!

刑事「馬鹿なたわ言は止せ、えいッ。」

刑事、太吉の身體に飛び込み、太吉をねじ伏せる

太吉「（抵抗し乍ら）後生です、お頼みです!!

刑事「何くそ。!!

太吉「（奮然として抵抗す）これ丈云つても、承知しないのだなあ。

刑事「何を承知するか。!!

太吉、刑事巴になつて格闘す、千代戦き乍らどうする事も出来ぬ

太吉「（格闘し乍ら）千代!!、逃ける、もうこうなつたら駄目だ、俺は構まはぬから、逃ける。

千代「ろくとする

太吉「（懸命に刑事の下から）千代、逃けないか、千代!!

千代「は、はい。

千代素早く逃げやうとすると、牛五郎、千代を追かける

刑事「（太吉を押へ乍ら）牛五郎!!、阿魔をふん縛れ。

牛五「おう!!

千代の後髪を握り引き戻す

千代―(逃れ様として)アッ!!、お前は牛五郎!!

牛五―御役人さんの御許しだ、さあこい。

千代―(抵抗し乍ら)畜生!!

牛五―(千代を引きづり乍ら)愚圖々々ぬかすな、こうなつたら、貴様は俺のものだ。

嬰兒火のつく如く泣く、千代懸命に逃げ様とする、太吉奮然として立つ、千代、牛五郎の手を振り切り上手へ逃げる、牛五郎追かけてむづと後襟をつかむ、太吉隠してゐた小刀を握り矢庭に刑事を突きつけ牛五郎の後より背中に突通す

太吉―うぬ、畜生、こうしてやる!!

牛五―(虚空をつかみ乍ら)や、やりやがつたなあ。

ばつたり倒れる、刑事太吉につかみかゝる

太吉―(千代に)逃けろ、後は心配せず、早く行け。

刑事―(太吉をねじ伏せる)くそ!!

太吉永い疲勞でばつたりとくたばる、刑事捕縄を素早く太吉の首にかゝる、太吉奮然として抵抗する

太吉―もう、こうなりや貴様も生かさぬぞ。

刑事―をう!!、やるなあ!!

二人上になり下になり格闘する、轉び乍ら地藏堂の傍迄来る、太吉ねじ伏せられ小刀を奪はる

太吉——残念だ!!…………

刑事——(ねじ伏せ)縛につきやがれ!!

太吉——(必死に)何を…………

太吉、必死に起き上らうとするが起き上れぬ、刑事捕縄を手へ巻かうとする、

太吉——(懸命に)千代!!ドスをやれ、ド、ドスを。

戦っていた千代轉び乍ら、大地に投げ捨てゝあつた小刀を太吉に渡す、太吉、無中になつて刑事の腹部めがけて突き上げる

刑事——うをう!!

刑事絶叫して倒れる、太吉素早く起き、刑事を谷底へ投げ落す、谷底へ落ちる音が微かに聞える

千代——(がく然として叫ぶ)アツ!!

太吉、血に塗れた小刀を振つて、無言のまゝ千代を見つめる、千代も戦き乍らべつたり坐りこみ太吉を見つめる

太吉——(戦き乍ら)や、やつて了つた。

千代——(無言)…………

太吉——(悲しげに)千、千代、これで何もかも、お了ひだ。

千代——(悲しげに無言)…………

太吉―千代、俺は到々、俺の考へこは丸で反對の事をしてすつた、俺はもう駄目だ。

千代―(戦きつゝ) あゝあな、た。

太吉―(千代の傍にくる) 千、千代、もう、こうなつたら仕方ない、俺の最後が來た譯けだ。

千代―(きつと見る) えッ。

太吉―お前は心配するな、お前はこれから親の所へ、子供を連れて行つてくれ、只、もう俺と二度と顔をみる事が出来ない丈だ。

千代―(じつとみて無言)…………

太吉―千代、見ろ、こうして二人も殺したら命があると思ふか、それに俺あ脱走兵で強盗だ。

千代―(言葉につまつて無言)…………

太吉―だが、お前丈は生きて呉れ、子供の爲めだ、俺はこゝで死ぬ、お前に迷惑はかけぬから、早く親の所へ行つてくれ。

千代―(きつとみて無言)…………

太吉―な、なにをほんやりしてるのだ、俺は助かろうにも助かれない身體ぢやないか、

千代―(見上げた儘無言)

太吉―判らないか行けと言つたら行け、後は心配せずに行つてくれ!!

千代―(ヒステリツクに) いゝえ、行きませぬ!!

太吉―馬鹿、今更何を云ふのだ、何のため此處迄來たのか、お前忘れたのか？

千代―(かぶり振り乍ら) い、え、行きません、何云つても行きません。

太吉―な、なぜだ？

千代―貴方こそ、何故そう云ふの？、後に残つて貴方は、どうするの？

太吉―俺？、俺は自決する迄だ。

千代―(反抗的に) 自決？貴方は自分一人死んだら、それでいいと思ふのですか。

太吉―(まごつき) そ、それでいいぢやないか、俺は此處で死ぬ、お前は親の所で子を育てる、俺はそ

れでもう本望だ。

千代―そんな言葉は大概振り、お云ひなさい、成程貴方はそれでいいかも知れぬ、然し、私は不服です。

太吉―何が不服だ、それ以上、この場合我儘が云へると思ふか、おい、今になつて何を云ふのか。

千代―(反抗的に) いえ、申します、え、云ひますとも、それは餘り不人情云ふものです、貴方、夫婦つてそんなものでせうか？

太吉―(つまつて無言)…………

千代―私は貴方が恨めしい、貴方、夫に死なれて、私が一人で生きてゐられますか、坊やはどうするのです！

太吉——（我漫されなく）だから、今迄云つてゐるぢやないか、親の所に行けつて。

千代——ぢや、親の所へ行つたら、幸福になれると思ふ？

太吉——（つまつて無言）……

千代——そんな事があるものですか、よしんばそうなつても私には出来ません。

太吉——ぢや、さうするのだ。

千代——私も坊やも一緒に死なして下さい。

太吉——死なす？

千代——そうです、一緒に殺して、もう私こんな、腐つた世の中に愛想がつかしました、もう生きる勇氣がありません、私も一緒に死なして下さい。

太吉——（ちつとみて無言）……

千代——ね、死なして、坊やも一緒に殺して。

太吉——（急にかぶりをふる）嫌だ、俺あ嫌だ、俺さしてそんな事は出来ない。

千代——出来ない？

太吉——（決然として）出来ない、何云つても出来ない。

千代——（きつとなり反抗的に）ぢや頼みません、これ程頼んでも一緒に死なして呉れないのなら、自分で勝手に死にます。



太吉―死ぬ？

千代―え、死にますとも、意氣地なし、お前が殺す事が出来なかつたら、こつちで勝手に死んで見せますとも。

（嬰兒を見つめ）ね、坊や、一緒に死のうね、お父ちゃん、お母ちゃん、お爺さん、お婆さん、一緒に行つたら、幸福だ、考へてられるのよ、判らずやでせう、ね。それが本當だつたら、ずつと昔からお母ちゃん、曲馬團なんかで苦しむはしない筈だわね、お父ちゃん、生きてたら幸福だ、考へてるお馬鹿よ、今坊やと一緒に、お爺さん、お婆さん、一緒に行つたら、どうなる、考へる、坊や、坊やは又曲馬團にでも賣られるのよ。え、食ふために人に取られるわ、お母ちゃんにはそれが判るの、貧棒人はね、そうするより仕方がないの、でもお母ちゃん、それが出来ない。お母ちゃんは、今迄あきらめ、苦しんで来た、それ、お父ちゃん、お母ちゃん、お爺さん、お婆さん、生きて苦しむより、お母ちゃん、あの世で楽しく暮そうね、あの世はい、所よ、死んでね、坊や、まあ、何んて罪のないの、にこ、にこ、笑つてゐる。

（急に太吉に振り向く）貴方!!

太吉―（千代をみる）なんだ？

千代―（嬰兒を抱き示し）このニコ、ニコしてゐる坊やを見て、貴方はこの坊やに生きれ、云ふの、生きて苦しめ、云ふの。

太吉——（噛み捨てる様に）馬鹿な!!

千代——いゝえ、きつこそうです、だが私は嫌です、坊は私がお腹を痛めた兒です、私はこれ以上苦しめる事は出来ません。えゝ、出来るものですか、さあ一緒に死なして。

太吉——（まごつく）お、お前は何度云つたら判るのか、お前ばかりぢやない、今度は赤ん坊迄死なせ様にするのか、そりや嫌だぞ!!

千代——嫌、貴方は嫌でも私は死なせます。

太吉——馬鹿ぬかすな、黙つておればどんな事でも云ふ。千代、落ちついて聞け、俺あ、お前の心はよく判る、そんなに迄思つて貰へるミ、反つてこちらが御禮を云ひたい位だ、千代、こゝだぜ、俺も人間だ、一人淋しく死ぬよりこうなつたら、お前ミ抱き合つて心中した方がどれ程好いか判りやしない。お前一人だつたら俺あ、そうするかも知れぬ、然し俺が出来ないのは、この子のためだ。

千代——此の子？

太吉——そうだ、千代判らぬか、此處に来る時もあれ丈云つたぢやないか、親の爲め子供の命迄失くすのは、そりや昔はさうか知らぬが、今は出来ない、いや今の人でもやつても、俺には出来ない。そりや慘酷ミ云ふものだ。

千代——そうぢやないです、貴方はこれ程頼んでも判つてくれないの、生きてたらこんな苦しみがある

こ考へる、親なしの一文なしの子供ですよ。

太吉——うなだれて無言……

千代——（手をついて）貴方、死なして、二人を助けると思つて死なして……

太吉——（無言）……

千代——それが、只一つの道ですの、夫婦として、最後の願ひです。

太吉——（無言）……

千代——ね、ね。

太吉——（苦しげに）お、お前はいい、だが子供のために俺あさうしても出来ない。

千代——（きつとなり）これ程頼んでも。

太吉——（無言）……

千代——ぢや、もういい、意氣地なし!!、赤ん坊はこつちで勝手にします、貴方は貴方で勝手にしない。

太吉——（すてる様に）あ、あ、やれるならやつて見ろ。

千代——（反抗的に）ええ、やりますよ。

狂氣になつた千代、嬰兒を毛布の上にねかす、そして腰紐を一本外す

千代——坊や、母ちやんを恨むんぢやないよ、ね、こうするより幸福になれる道がないの、母ちやんも

直ぐ、來ますよ。苦しくても、ほんの一寸だから辛抱するんですよ、ね、判つて、そうい、わね、母ちゃんも直ぐ來るよ。

千代、泣き乍ら嬰兒の顔を包み、腰紐で嬰兒の首を巻く、たまらなくなりうつぶし諦めやうとする、嬰兒火のつく如く泣く、太吉狂氣になつて千代を突き飛ばし嬰兒を抱きとる、千代わつと泣き伏す

太吉―馬鹿野郎、貴様氣が狂つたか。(嬰兒を抱き)坊や痛かつたろう、もう父ちゃんが痛い目にさせないよ、さあ麓に行こう、母ちゃんから逃れやう。

太吉、嬰兒を抱いてよるめき乍ら下手へ行かうとする、千代かばと飛び起き太吉にすがる

千代―貴方!!

太吉―(振返り)な、なんだ。

千代―貴方はその子をさうする積りなんですか

太吉―此子を捨てるのさ、麓の家の前迄でも捨てに行くのだ。

千代―(太吉に取りすがる)貴方、何故貴方は判らないの、此の子が可愛想を考へないの、その子は私に返して下さい。

太吉―嫌だ、渡してたまるか、殺させにやるのと同じぢやないか。

太吉、振り切つて歩きます、千代必死になつてすがる

千代―貴方、その子は私の子です、私に返して下さい。

太吉―馬、馬鹿な、この子は俺の子だ、返してたまるものか。

千代―いえ、返して。

千代、足にとりすがり離さない

太吉―(蹴り上ぐ) 邪魔するな。

千代、ばつたり倒れる、とその手に大地に捨てゝあつた小刀がさわる、千代無中になつて太吉の後ろより小刀で突き刺す

太吉―(片手を上げ乍ら倒れる) をう!! やつたなあ。

太吉、嬰兒を抱いた儘はつたりうつむき倒れる、千代素早嬰兒を取らうとするが、太吉離さぬ、太吉左手小刀を持つた千代の片手をつかみ、右手に嬰兒を抱き乍ら又立ち上る

太吉―返しやしないぞ、死んでも返さぬぞ。

千代―返してく、この子は私の子だから返して!!

太吉―ばかな、ばかな!!

千代―いえ、返して、さあ、返せくく。

千代すっかり狂氣になり太吉にいどみかゝる、太吉我慢し切れなくなり左手を強く振りはなすと、その小刀が千代の胸にぐさりと突き刺す千代絶叫しはつたり倒れる

太吉―(がく然とする) やつた!!

千代―(又起き上り懸命に太吉にすがる)坊やを返して、坊やを返して。

太吉―(急に出血のためはったり倒れ乍らも)坊やは返さぬぞ。

千代、太吉に、にじりより嬰兒を取らうとする

千代―返せ、坊やを返して!!

太吉、よるめき乍ら立ち上る

太吉―返す、返すものか、こりや俺の子だ、この子のため指一本も渡さぬぞ。(悲痛に絶叫す)おうい!!

誰れかるないか、おうい!!

太吉、絶叫し乍ら下手へ歩く、夕暮れの山中、物すごい山彦の外に何の反響もない

太吉―おうい!!、おうい!!

太吉、嬰兒を抱いて下手へよるめきつゝ行く、千代はらばひ乍ら追ひすがらうとする

千代―ほ、ほうやを、かへ―せ!! ほ―やを返へ―せ!!

千代、尙はらばひ乍ら太吉の後を追ふ、太吉の叫びが、微かに聞える、吹雪吹きしきる、舞臺暗黒、黒幕

## 第五幕 第二場

時 前場より半時間後 夜近し

所 多良岳山中

人 太吉

千代

舞臺 寂寞とした何物も生えてゐぬ岩面の山手、雪で眞白である

幕あくと、吹雪、猛烈に降りしきつてゐる、太吉、嬰兒を抱き乍ら上手よりよろめき乍らくる

太吉—おう—い、おう—い。

吹雪の音に消されて何も聞えぬ

太吉—おう—い、おう—い、この兒を養つてくれ—、おう—い。

太吉、ばつたり出血のため倒れる、嬰兒泣く

太吉—(起き上る)泣くなよ、泣くな、お前を少しでも幸福にしてやりやにやきや、父ちゃん心配で死んで行かれないのだ、寒いだろうが辛抱しなよ、もうすぐだからな。

太吉、よろめき乍ら立ち上る、嬰兒泣き續ける

太吉—(嬰兒をみて)泣くな、お前がそんなに泣くこ、父ちゃんの胸はえぐられる様だ、さあ、子守歌を唄つてやるよ。

ねんねん

ころ／＼ねんころよ

太吉悲しげに唄ふが嬰兒泣き止まぬ、はるか上手より千代の絶叫が聞えてくる

聲　—ほーやを、かへーせ!!

(聞えぬ)

太吉—坊や、泣くんぢやない、さあ、さあ。(悲しげに)

坊やのお守はごこ行つた、

あの山越えて　谷越えて

ねえやのお里へ　行きました……

太吉、ばったり倒れる、嬰兒なき叫ぶ

聲　—(次第に近づく)ほーや!!　ほーーや……

太吉—(聞えぬ又起き上り)　さあ、泣くな、お父ちゃんは麓へ連れて行つてやるよ、さあ。

太吉、起き上ろうとするが、身體全身が戦き出し、ばったり、うつぶす

太吉—(もだへ乍ら)　ぞ、残念!!　この子も、こゝの雪の中で殺すのか、坊や、ゆ、赦るしてくれ!!

嬰兒泣き續ける、太吉只身をもぐ丈で、身體が動かぬ、戦く手で嬰兒を差し上げ

太吉—ほうや、ご、父ちゃんを、う、恨むなよ!!

太吉、嬰兒をばったり取り落とし、その儘冷たくなつて了ふ、嬰兒寒さに泣きつゞく、吹雪吹きまくる



聲——ほうやを、かへーせ!!

上手より、はらばひ乍ら着物も亂れた千代が叫び乍ら来る

千代——(苦しげに) ほうや、ほうや。

千代、立ち上る、舞臺中央に倒れ死んでゐる太吉に目が止り、キツとなる、そし嬰兒の聲に耳を立つ、

千代——(嬉しげに) お、!! 坊やの聲だ、坊やの聲だ。

千代、轉び乍ら嬰兒に、じりより、狂氣の如く抱きよせる

千代——冷かつただろ、まあ鐵の様に冷えて、可愛想に——。

千代、きつく嬰兒をだきよす、その痛さに嬰兒泣く

千代——泣いちや嫌!! ほうや、い、ここ行こうね、もうこんな世中なんか、二度と生れるんぢやないよ。

千代、思ひ出した様に、冷たくなつた太吉をみ下す、千代べつたり坐る

千代——(ゆすり乍ら) あなた。

太吉——(聲なし)

千代——(鋭く) あなた!!

太吉——(聲なし)

千代——(眞青になる) あ、!!

千代、太吉の死を感じて急に泣き出す太吉にとりすがり

千代——か、かんにんして、勘忍してくくくくく……私は貴方を殺して了つた、貴方は見下け果てた女だと思つて死なれたでせう。あ、（身もだへし乍ら）私は、さうすりやい、？　さうすりやい、？　貴方、私は無中でしたの、勘忍して、私もすぐ参ります、あちらで御詫び申します。（嬰兒を前に坐らせる）さあ坊やも詫やまつて、貴方、かんにんして、貴方、一言でい、から、ものを云つて頂戴!!

太吉——（聲なし）

千代——（悲しげに）あ、貴方は死んで了つたの……

千代、呆然と立つと急に出血のため倒れる、千代嬰兒を抱きよせる

千代——坊やくく、母ちゃんはさうしやう？

千代、狂氣になる、千代上手の空を見上げて急におびえる

千代——（嬰兒をかばひ乍ら）お、お前は牛五郎!!お前は未だ苦しめたいの、あつちへ行け、けだもの!!（たまらなくなり下手をみる、又急におびえる）あッ、曲馬團の親方、御免なさい。もう、その靱は赦るしてく、もう何でも聞きます、あ、何でも聞きます。（逃げる様に身をもたえる、そして中央の空を見上げて又おびえる）あ、あそこからも、おかみさん!! 私はん死でもそんな商賣嫌です、後生だから赦るして、（又上手に何か認めて恐れ戦く）あ、あそこにも、（又下手を見る）お、そ

ここからも、（急に耳をふさぐ）（吹雪吹きつゝの）あゝ、皆けらく／＼笑つてゐる。（急に反抗的になる）何がおかしい？こゝうして三人死んで行くのに、ミミがおかしい？誰がこんなにしたのだ。（耳をそばだてる）何？私達をこゝうしたのは俺等ぢやない？、馬鹿!!、虚言つき!!、何？、違ふ？、では誰れだ？、え？、なに？

千代、身を進め様として、ばつたり倒れる、が又苦しげに起き上る、そして太吉の冷たい姿を見て急に泣き悲しげに上を見上げる、涙がこみ上げてぼた／＼流れる

千代——私、私、私、私、私、私、………（泣きふす）

雪漸く靜かに三人の上に降る、千代、急に嬰兒を抱き立ち上る

千代——（空を見上げ）あゝ、貴方、もう、そこを行くの、待つて下さい。あゝ、何故待たないの、え？待つ、そう、（嬉しげに）さあ、坊や、行くよ、母ちゃんミ、いゝミ、行くよ、あゝ、貴方、待つて、待つて、たら待つて……。

千代、空を見上げ、何か言ひ乍ら嬰兒を抱きつゝ走り行こうとするが、ばつたり倒れたまゝ動かぬ、彼の女の手が只淋しく何か探し乍ら虚空へ戦く、雪思ひ出した如く三人の上に降りつもる。——幕——

（暮れる多良岳終り）